

文: 齊藤想  
八川克也  
井上裕之  
平渡敏  
一田和樹  
(誕生日順)

絵: 佐倉さく



# セラエノの 小さな物語

小説現代、S-Fマガジン常連  
掲載者5人の送るショートショート集

## はじめに

---

小説現代「ショートショートコンテスト」、S-Fマガジン「リーダーズ ストーリー」掲載常連5名が集いました。

ショートショート好きの、ショートショート好きによる、ショートショートのためのショートショートアンソロジーです。

各人各様の奇想をお楽しみください。

表紙の絵を描いていただいたのは、佐倉さくさんです。

佐倉さくさんの紹介ページは[こちら](#)になります

なお、掲載は誕生日順になっております。

2011年2月14日

[齊藤想](#)

[八川克也](#)

[井上裕之](#)

[平渡敏](#)

[一田和樹](#)

初めて書いた作品がある出版社の「優秀賞」に選ばれたのがきっかけでショートショートを書き始める。

そこから悪戦苦闘を続けるも、徐々にコツを覚えてきて、気がつくとも第7回大阪ショートショート大賞、第14回一休とんち大賞、SFマガジン・リーダーズストーリー掲載7回などの受賞歴を重ねる（他に細かい賞もモロモロ）。また、幸運なことに、『大好きミステリー⑨』と『こわい！ 闇玉』に自作短編が収録される。

ひょんなことから、現役のコピーライターで、数多くのシナリオ作成に関わってきたストーリーデザイナー・ぴこ山びこ蔵さんと知り合い、「ショートショートの作り方のコツをみんなに教えてくれ」と口説かれる。こうして始まった実践的創作法メルマガ『サイトーマガジン』も今年で3年目に突入。

2010年にサイトーブログを開設する。当初は自作と日記を中心とする予定が、ネットの海に埋もれている名作や傑作を掘り起こす作業に夢中となり、いまや多くのアマチュア作品を紹介することに生きがいを感じている。ひと粒で何度も美味しいブログを目指し続けている。

もちろん、現在も各種公募に向けて精力的に執筆中。

ブログ：[『サイトーブログ』](#)

メルマガ：[『サイトーマガジン』](#)

## 謎のカードはここに

---

「君たちはC・モフェットの『謎のカード』という短編小説を知っているかね」

小さなバーの中央で、サムはメンバーを見下ろすように発言した。すでに定年退職をして悠々自適の身であるサムは、この月1回のミステリの集いに顔を出し、自らの知識や推理を披露するのが生きがいになっていた。

ここにいるメンバーは彼に劣らずのミステリ好きの集まりだ。知っているか、と聞かれれば、知っていると答えるに決まっている。なにしろ、『謎のカード』という短編小説は、物語中に示された謎に明快な解答を与えないまま終わるというリドル・ストーリーの古典かつ名作なのだ。そのような質問をされること自体が、ここのメンバーにとっては不愉快なことだった。

サムは、視線の意味を感じたのか、少し控えめに言葉を継いだ。

「この会のメンバーであれば、知らぬ人はいないと思いますが、確認の意味を込めまして簡単にストーリーを説明いたします。主人公は旅先のパリで見知らぬ美女から謎のカードを渡されます。フランス語を理解できない主人公は、カードに書かれている文字が読めません。そのため、カードを知人に見せて内容を知ろうとしますが、そのカードを見た人は例外なく「なんということだ」と頭を抱えて主人公と縁を切ってしまいます。警察に逮捕されて旅先のフランスから国外退去処分を受け、妻からは離婚され、長年共に事業を築き上げてきた無二の親友からも、カードを見せた途端に共に仕事を続けることはできないと手のひらを返されます。しかも、だれもそのカードの意味を教えてくださいません」

ラム酒をちびちび舐めていた老人が、サムの言葉を止めた。

「つまり、ここでその話を持ち出したということは、カードの謎を解いた、という自信があるわけじゃな」

「そうそう」

サムは軽く答えた。

「いくら自信があると申しましても、私の解答を簡単に披露してはつまらない。ぜひとも皆さんに『謎のカード』の秘密を推理してもらおう、というのが今回の主旨でございます」

彼の尊大な態度にメンバーは不服そうだが、根がミステリ好きの集まりなので、すぐに話に花が咲く。

「確か作者のモフェットは解答編を書いている、それが“悪魔の魂の絵”とかよく分からない代物だったというなあ」

「そうそう。だれもが納得する解答ではなかったので、未だに謎が続いているわけだ」

ベテランたちが、お互いの知識を確認しあう。しかし、考え込むばかりで容易に解答案が出てこない。サムがこの難問を解いたのは自分だけだという優越感に浸りだしたころ、「私なら」と若手が案を提示した。

「どうぞ」と自信満々にサムが若手を促す。

「だれもが恐怖するような気味の悪い絵だった、というのはどうだろう。つまり、その絵を見たらだれもが主人公のことを嫌いになってしまうほどの、酷い絵というわけだ」

「ダメだな」サムは即座に否定した。

「カードには主人公の読めないフランス語が書いてあった、とある。その事への説明がなされていない。いくら吐き気を催すような絵だからといって、妻が離婚を迫ったり、共に事業をしていた長年の親友が絶縁を迫ったりするようなことがあるものか。しかも、絵であれば、主人公も内容を理解できるはずだ。つまり、書かれている文字が重要なのだ。まったくもって、不十分だ」

酷評された若手はふてくされた。それでは、と今度は中堅が手を挙げた。サムは解けるわけがないとばかりに、鷹揚にソファーに座り直して、合図の代わりにウィスキーの氷を鳴らした。

「聞かせてもらおう」

「実は主人公は一杯食わされたのです」

「と、いいますと？」

「そのカードには“この男と理由を言わずに縁を切るふりをしよう。そうして、みんなでからかおう”と書かれていたのだろう。そして最後に、実はエイプリルフールでした、とネタ晴らしをして終わるのだ」

「実につまらない話だ。ミステリとして失格だな」

サム残りのウィスキーを一気に飲み干した。中堅が顔の皺に不平を溜めた。

「主人公は旅先のフランスから国外退去処分を受けている。貴方の説が正解だとすると、警察もエイプリルフールの冗談に協力したことになる。これこそまさに、冗談ではない。もう少し真剣に考えて欲しいものだ」

サムの容赦のない反論に、白けた空気が流れ始めた。サムはそろそろ潮時と見たのか、新しいウィスキーを注文しながらソファーから立ち上がった。メンバーたちの注目を浴びるこの瞬間が、彼にとって至福の時だった。

「それでは解答をお教えしよう。実は謎のカードには不思議な能力が込められていて、書かれている文字は、読む人の痛い部分、つまり誰からも知られたくない心の底をえぐり出すような、辛辣で、嫌みな言葉が現れるのだ。妻が眼にするときには妻の不倫の事実が暴かれ、フランス警察が手に取れば国家機密が、事業を共にしていた親友の前では事業に関する不正が、それぞれカードに浮かびあがる。これを見た友人たちはもちろん彼との縁を切るしかないし、内容を聞かれても教えることはできない。どうだ、これ以上の解答はあるまい。私の解答が間違いだと指摘できる者は、いつでも申し出てくれ」

サムは自信に満ちあふれた表情で、メンバーを見下した。だれもが沈黙を保つ中で、先程からラム酒をちびちびやっていた老人が重々しく口を開いた。

「まあ、穴というほどでもござらぬが、モフェットの原作では、カードを渡した美女の死とともに、カードは白紙になって終わる。そこについての説明はどうなっているのかね」

「それは簡単なことだ。カードが持つ不思議な力の源泉はその美女で、美女の死とともにカードの力が消滅したのだ」

老人はひとりで大きく頷いた。しかし、老人の言葉には続きがあった。

「なるほど。実にその通りで、論理に隙がない。そこで君に質問だが、君の答えが正解かどうか、確かめたいかね」

「もちろんさ。確かめる方法があるのならね」

「それが、あるのだ」

メンバーの注目が老人に集まった。老人は手にしていたラム酒の入ったグラスを、静かに檜のテーブルに隅に置いた。そして、グラスの代わりに胸元から出した一枚のカードを手を取った。

「実はこのわしもその美女と同じ力を持っているのだ。その謎のカードをある人物から託されてのう。

このカードはご存じのとおり、見る者を不幸にする。だから今まで誰にも見せなかったし、存在すら隠してきた。だが、もし、お前さんがどうしても自分の解答が正解であると確かめたいのであれば、このカードをその手に取ってみるがいい。もちろん、お前さんに勇気があればだが」

「けっ、くだらねえ」

サムは言葉の勢いのまま、老人からカードをひったくった。サムが手に取ると、不思議なことに白紙のカードにフランス語が浮かび上がってきた。不幸なことに、彼はフランス語を理解できた。そこには、今まで彼がメンバーに語ってきた知識は雑誌の受け売りであること、披露してきた推理は他人の借り物であることなど、彼が秘密にしたい、いや、自らの立場を守るためには秘密にしなければならない事実が書かれていた。もちろん、彼が披露した『謎のカード』の解答についても、あるミステリ研究会のパクリであることが記されている。

「早く何て書いてあるのか教えろ」

「あれだけ大口を叩いて、まさか間違えませんでしたは無いだろうな」

「そんな事をしたら退会処分だ」

「ご託はいいから、早く書かれている内容を教えろ」

メンバーが口々にサムに迫る。老人は自分の仕事は終わったとばかりに、再びラム酒を舐め始めた。

サムは重大な選択に迫られた。カードに書かれている内容を読み上げて、自らの立場を失うのと引き換えに自分の解答が正しいことを証明するのか。それとも自らの秘密を守るために、完璧なる解答を放棄して、自分の経歴に大きな汚点を残すのか。

決断までの時間は、もうありそうにない。

サイトブログ2010年8月27日掲載作を修正

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

C・モフェットの『謎のカード』は、F・R・ストックトンの『女か虎か』に次いで有名なりドルストーリーの古典であり、傑作でもあります。

リドルストーリーの回答編を書こうと思ったのは、SF作家の高井信先生からリドルストーリーについて教わったのがきっかけです。『謎のカード』は『女か虎か』とは違いパズル的要素が強く、解こうと思えば解けなくもありません。しかもモフェット自身による回答編は、作中でも触れているように、正直、さえないものです。

世の中に回答が出回っていないのならば、自分で書いてみよう。ということで生まれたのが本作になります。

書き上げた作品を高井先生にお見せしたところ、回答不足の点を指摘されたので、修正をほどこしました。リドルストーリーの回答編をリドルストーリーにしたのは、ぼくのこだわりです。

作者的には合格点を与えられる回答だと思っているのですが、いかがでしょうか？

「さあ、今年も老人選抜大運動会の季節がやってきました。今回も人生の荒波を乗り越えてきた勇者たちがぞくぞくと集まっています。医療の発達とともに超高齢化社会を迎え、これからの課題はただの長寿ではなく、健康で長生き、となりました。生涯現役を目指して、さあ、張り切っていきましょう！ 最初の種目は一〇〇メートル走です」

老人たちはゆっくりとスタートラインについた。捨蔵は孫やひ孫たちがスタンドで観戦しているのを見つけると、大きく手を振った。ひ孫は無邪気に「ひいじいがんばれー」と、応援してくれる。

「位置について、用意！」

スタートの合図で、老人たちは全員一斉に飛び出した。捨蔵の隣の選手はロケットシューズを履いている。踵にあるボタンに触れると靴底が火を噴いた。だが、老人の力ではロケットシューズを制御できそうにない。哀れなことに、彼の靴だけが一着でゴールラインを飛び越え、靴の持ち主は腰を抜かしてうずくまっている。

捨蔵は悲しそうな表情をしている老人を横目で見ながら、這うようにして一〇〇メートルを歩ききった。この運動会で大事なは無事にゴールすることだ。見栄を張ることはない。最新鋭の技術を活用できれば、もちろん有利になる。だが、失敗したら取り返しがつかない。一番信用できるのは、今も昔も自分の肉体だ。

ゴールできなかつた何人かの老人が大会から排除された。残った老人は次のステージへと向かう。

「次の種目は走り幅跳びです。助走路の先にあります白線を越えればクリアーです。毎年、このステージでは多くの勇者たちがふるい落とされているので、注意してくださいね」

捨蔵は、砂場に引かれているラインまでの距離を目視で確認した。前回の大会でも捨蔵はギリギリだった。あれから、4年も経過している。捨蔵は、目指す目標の遠さを実感した。

競技は淡々と進んでいく。走り幅跳びは走力だけでなく踏み切り技術も必要だ。助走の加速と跳躍力を倍増させる超反発力シューズを着用している老人が多かったが、加速しすぎて踏み切り板を超えてしまったり、飛び上がる角度が合わなくて真上に跳躍する老人が続出した。なかには小型ロケットに乗り込む老人もいたが、あえなく着地に失敗して失格のコールが鳴り響いた。捨蔵が見たところ、ほぼ半分の老人が大会から消えている。

「ゼッケン七七九一番。弘瀬捨蔵殿」

捨蔵は自分の名前が呼ばれると、孫から渡された自動注射器を太ももに二本打ち込んだ。できるだけ文明の利器は使いたくない。失敗即退場のこの大会では、使いこなせない道具は諸刃の剣だ。しかし、この走り幅跳びだけは自信がない。

「いくでございます！」

捨蔵は審査員に右手を上げると、いつものようにゆっくりと助走を開始した。ひ孫に教わったとおり、歩幅をあわせることだけに集中する。捨蔵の足に力がみなぎっていく。踏み切りラインが目に入ると、捨蔵は右足に力を込めた。踏み切り板よりかなり手前だ。砂場に引かれているラ



インが思ったより遠い。足を伸ばす。ラインを辛うじて越えたところで、捨蔵の足は砂場に突っ込んだ。バランスを崩して尻餅をつきそうになる。ここで後ろに倒れたら失格だ。捨蔵は上体に力を込めて、なんとか前向きに倒れることに成功した。

「ゼッケン七七九一番。弘瀬捨蔵選手、クリアーです」

会場から歓声が上がった。

捨蔵は冷や汗をぬぐった。もし、強力な筋肉興奮剤を使用していたら、制御不能となって背中から倒れていたことだろう。この大会は一息たりとも気を抜けない。過酷なサバイバルレースなのだ。

休む間もなく、老人たちは次の競技へと駆り出される。砲丸投げに走り高跳び。さらには自転車競技も繰り広げられた。老人たちは各種最新機具を活用しながらゴールし、なかには機具に振り回されて失格となり、涙にくれる老人もいた。

捨蔵はできるだけ自分の肉体だけで大会に臨んだ。だが、寄せてくる年波には勝てず、疲労回復剤と筋肉補助装置は使用せざるを得なかった。疲労回復剤は筋肉にたまる乳酸を速やかに排除する。しかし、使いすぎると筋肉へのダメージが蓄積される。捨蔵は競技中に筋が切れる幾多の老人を見てきた。身動きの取れなくなった老人たちは、若者が担ぐタンカで医務室ではないいずこかへと運ばれていく。

「次は最後の種目となります。もっとも過酷な一〇キロ走です」

スタジアムから一斉に歓声が上がる。この競技さえクリアーできれば、英雄として晴れてこの会場から退場できるのだ。捨蔵はひ孫たちの様子を見た。観戦に疲れたのか、健やかな寝顔を家族に見せていた。息子夫婦はひ孫と捨蔵の顔を見比べて、複雑そうな表情を浮かべている。

一〇キロ走は残っている老人が一斉にスタートする。この競技の先着順で合格証明書が与えられるのだ。

「今年の優先枠ですが、先着三〇〇人です！」

前回と比較すると一桁少ない。競技の参加者が一斉に不平の声を上げる。

「最近の財政窮乏のおり、景品の数には限りがあります。さあ、始めましょう」

スタートの合図が鳴らされ、老人たちはあわてて駆け出した。捨蔵も人波に飛び込んでいく。この競技はただのスポーツ大会ではない。限られた景品を得るために、捨蔵は全力を尽くさなくてはならないのだ。

前半はハイペースで進んだ。捨蔵はひ孫が事前に録音してくれたメトロノームの音にしたがって、両足を動かし続けた。捨蔵はひ孫のサポートを得られるだけ幸せだった。中にはサポートどころか妨害を受ける老人もいる。家族の助けを受けられない老人たちは、競技を有利にする薬も道具も与えられず、絶望的な気持ちで大会に参加せざるを得ない。

先頭集団が崩れてきた。捨蔵はいままで疲労回復剤の使用を抑えてきたお陰で、2、3キロごとに使用することができた。両足をサポートしてくれるロボット太ももの動きも滑らかだ。いままで無理をしてきた先頭グループが、徐々に崩れ始める。ここまで生き残ってきたのは勇者ばかりだ。捨蔵もひ孫のために負けるわけにはいかない。

老人たちがスタジアムに戻ってきた。一〇キロを走りぬぎ、だれもが疲労困憊だ。捨蔵もなん

とかゴールしたが、自分の順番を確認する余裕がなかった。

捨蔵は芝生の上に大の字になった。捨蔵は幸せだった。齢一〇〇歳を超え、いま生きているだけでも神に感謝せねばならない。それが、医療技術と老化阻止技術の進歩により、こうして歩き、飛び、そして走ることまでできるのだから。

捨蔵の順位が発表された。その瞬間、捨蔵は天に向けて両拳を突き上げた。三百位以内に捨蔵の名前が入っていた。これで次の大会まで捨蔵は生きる権利を与えられた。老人が死ななくなり、生涯現役が義務付けられたこの社会では、体力が衰え役に立たない老人は処分されるしかないのだ。

捨蔵は家族に向けてガッツポーズを見せた。だが、唯一喜んでくれるひ孫はすでに両親の腕の中で深い眠りに落ちており、次の大会まで扶養の義務を負った息子夫婦は、露骨に嫌な表情を捨蔵に向けていた。

## SFマガジン2011年3月号 選評作品

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

タイトルの脇にも書いているように、SFマガジン2011年3月号のリーダーズストーリーで、選評をいただいた作品です。星敬先生から「怖い作品」との評価を受けました。

老人が捨てられるという作品は、姥捨て山の伝説もあるように、昔から数多く書かれてきました。本作もその変形版に当たります。SFマガジンへの投稿を念頭に書いていますので、様々な機具が登場します。冒頭はコメディータッチで入り、ラストでブラックサイドに叩き込むという落差を意識しています。

昔から使われてきたシチュエーションというのは、手を変え品を変えて、今後も生き続けるのだと思います。

ぼくは全てが嫌になり、所属していた野球部に退部届けを叩きつけた。最後の大会の直前でレギュラーから外され、相思相愛だと思い込んでいたマネージャーにも振られた。目標を失い、茫然自失の態で家に帰る途中で、真新しい「死体屋」と書かれた看板を発見した。

ホラー映画からくり抜いてきたような古ぼけたビルの二階が、この看板の持ち主のようだった。ぼくは導かれるように階段を上ると、アルバイトらしい受付の女性が待っていた。

「いらっしゃいませ。様々なコースがございますが、どれにしましょうか」

ぼくは受付から説明を受けた。どうやら、ここは死体を体験できる場所らしい。死に方から埋葬のされ方まで自由に選べる。値段も良心的で、高校生のお小遣いで払える範囲だ。ぼくは、ファーストフードのセットメニュー注文するような要領で、メニューボードに指を滑らせた。

「練炭による一酸化炭素中毒ですね。場所は山中の奥深く。人知れず死にたい。以上のご注文を承りました」

ぼくは受付に個室へと案内された。そこには簡易ベッドがあり、指示されたとおり電極だけのヘルメットをかぶって横たわる。

「それではお楽しみ下さい」

すぐに瞑想が始まった。

イメージで描かれたのは、ネットで知り合ったばかりの人間たちと車で林道を登っていく場面だった。リーダーは中年の男性だ。彼は失職したときの状況や、家族離散の経緯をくどくどと話す。彼の話に興味を持っている自殺希望者はだれもいない。

車は脇道に入り、そこで停車した。手馴れた仕事のようにみんなで目張りをすると、後部座席で練炭を炊き始める。これといったイベントもなく、ひとりずつ意識を失っていく。車内に残された死体は、だれからも発見されることもなく、淡々と痛んでいく。

「途中でメニューを変えられますか」

ぼくは辟易してヘルメットを脱いだ。多少の追加料金がかかりますが、と言いながらも受付の女性は快く応じてくれた。ぼくは小銭で追加料金を払うと、メニューを変更した。

「次は自宅での睡眠薬中毒です」

イメージは、両親が冷たくなったぼくを発見したところから始まった。驚き、悲しむ両親。

悲しみの嵐が過ぎ去ると、ぼくの死体は事務的に処理された。縁も所縁も無い坊さんがお経を唱え、死体焼却場で丹念に焼かれ、残ったカルシウムの塊は小さな壺に詰め込まれ、重くて冷たい石の下に入れられた。暗くて湿った部屋だ。

クラスメイトは驚き、悲しんだが、痛みはすぐに消え去ったようだ。一週間もすれば普通の生活に戻り、ぼくのことなど最初から存在しなかったように見える

ぼくを振ったマネージャーは……と二年生のクラスを探すと、友人たちと楽しそうにお喋りをしていた。放課後は野球部で割り当てられた仕事を熱心にこなし、部活終了後はレギュラーになる見込み〇パーセントで走ることにしか能がない彼氏と一緒に帰宅する。監督はというと、サブメンバーに落とされたとはいえ堅実な守備を誇るぼくの死はチームにとって大きな戦力ダウンであ

るはずだが、代役に抜擢された一年生が急激に成長し、ぼく以上に生き生きとグラウンドを駆け回る。

こんなはずではない。人の死はもっと重いものだ。

ぼくは再度のコース変更をお願いした。これで最後ですよ、と言いながらも受付の女性は笑顔で応じてくれた。衝撃的な死を、ということで高校での飛び降り自殺を選んだ。しかも死ぬのは彼女の目の前だ。

ぼくがアスファルトに叩きつけられるのと同時に、高校では大騒ぎになった。ぼくは半分になった顔で、マネージャーに微笑みかける。彼女はあまりのショックに登校拒否になった。ぼくの死が波紋を呼び起こす様子を見て、軽い快感を覚えた。

騒ぎがさらに広がった。校長はマスコミへの釈明に追われ、監督は責任をとって退職した。監督の家族は収入の途を断たれ、子供たちは私立学校を中退せざるを得なくなった。

そんなはずではない。ぼくは叫びたくなった。

監督の家族より苦しんだのは、自分の両親だった。突然、息子を失ったショックが癒される間もなく、おたくの息子のせいで高校の評判ががた落ちしたと同級生の家族から無言の非難が向けられた。自殺の原因が不明とされたこともあり、警察に虐待を疑われて何度も事情聴取を受けた。近所や親戚の目もあり、両親は離婚した。暖かかった家族は消滅した。

全身汗だくになって、ぼくは目を覚ました。

「いかがでしたか？」

受付の女性が優しく微笑みかけた。

「いい経験をさせてもらいました」

ぼくはヘルメットを脱いで、丁寧に礼をした。

ビルの外はまぶしかった。野球の練習に明け暮れていたのも、太陽が明るいうちに帰るのは入学式以来だった。手の皮は潰れたマメで厚くなり、日焼けした皮膚は荒れ放題だった。

ぼくは家に帰るのを中止した。退部届けを撤回しよう。練習に戻ろう。許してもらえるのなら、監督を始めとするチームメイトには謝ろう。そして、嫌な思いをさせたマネージャーには、心から謝ろう。そして、彼女と新しい彼氏に祝福を与えよう。

ぼくは店を振り返った。先程まで出ていたはずの「死体屋」の看板が消えていた。古ぼけたビルは、まるで他人のようにぼくを見下ろしている。

あれは、何かの夢だったのだろうか。ぼくは細かく首を振ると、鍛え抜かれた肉体を駆使して、高校への道を急ぎ始めた。

初掲載

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

これは電撃マガジンの電撃リトルリーグ投稿用に書いた作品です。そのときに指定されたタイ

トルは「『夏到来、〇〇始めました』（〇〇に好きな言葉を入れる）」でした。アンソロジー収録にあたり、改題しています。

就職して間もないころですが、冬になると必ず一緒にスキーに行っていた友人を交通事故で失いました。スキーの帰りで、そのスキーにぼくも誘われていたのですが、都合が合わずに行けませんでした。旅行から帰ってきて、友人の死を知りました。

線香を挙げに友人宅に伺ったところ、突然息子を失った母親の悲嘆は、見るのも辛いほどでした。

そのときの体験を底流に敷きながら、この作品を書いています。綺麗事と言われてしまうかもしれませんが、希望を回復するラストは、簡単に死を選ばないでくださいというぼくなりメッセージです。

老人は安楽椅子に揺られながらパイプをふかし、緊張した面持ちの青年に向かって言った。「そういえば君にはまだ言ってなかったが、私は穴評論家でもあるんだよ」

「穴ですか」

不思議そうな顔をする青年に向かって、老人は大きく頷いた。

「そうだ、穴だよ。例えばコレを見てくれ」

老人はアルバムの中から蟻の巣の写真を取り出した。

「昆虫の世界で一番美しい穴はなんといっても蟻の巣だ。この穴は清き労働を象徴しているとは思わんかね。女王蟻一匹から始まったこの小さな穴が、女王蟻が子供を生み育て、成長した子供たちが母親のために働き、最後には地下五メートルにもおよぶ一大コロニーを築き上げるのだ。この穴を見るたびに、なぜ人間の家族はこうもいがみ合っているのかと悲しくなってくる」

「はあ、そうですか」

青年は興味がなさそうだった。

老人はパイプを持ったまま立ち上がると、カーテンを開け放った。すでに時刻は深夜0時を回っており、美しい星空が広がっていた。

「宝石のような星空にもブラックホールという穴が開いているが、その穴は逃れられない恐怖を象徴している。ブラックホールに落ちたら最後、強大な星でさえブラックホールの引力には逆らえず、光すら逃げ出せない。全てを飲み込むブラックホール。実に文学的なネーミングではないか」

老人はブラックホールについて語り終わると、青年に向き直った。

「世界中の穴という穴を探してきた私だが、つい最近、身近なところで実に魅力的な穴を発見したんだよ。その穴を求めることは倫理的には許されることではない。だが、穴評論家としてこの穴の魅力に勝てず、ついに私は禁断の果実を……」

「ところで先生」

青年は老人の言葉を遮った。

「それが当社の雑誌に穴をあける理由でしょうか。そろそろ原稿を頂かないと印刷が間に合わないのですが」

老作家は、申し訳なさそうに俯いた。

某ネット文学賞で大賞受賞作

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

この作品は、ネット上で1回だけ開催された某ショートショート大会で大賞を受賞した作品です。テーマは『穴』でした。そのときから手を加えていません。

このときの選者は架空歴史物を多数執筆されている名村烈先生と、ある現役シナリオライターでした。ありがたいことに、両先生から1番の評価をいただきました。

この作品を書いた時点でもいくつか受賞を重ねていたのですが、内実は試行錯誤の連続で、ひとつ書くのに、いまでは考えられないほど長い時間を要していました。

ところが、この作品を書く直前に閃くものがあり、実質的に5分で完成させることができました。このときの体験こそ、ぼくのショートショート技法の原点となりました。いままで数百の作品を書いています。この前とこの後では、作品の質は変わらないにしても、生み出される過程において雲泥の差があります。このときの感覚があったからこそ、いまでもショートショートを書き続けていると断言できます。

ぼくの中でひとつの転機となった思い出深い作品です。

共感覚というものがある。ひとつの刺激に対して、別の感覚が働いてしまうのだ。ベートーベンを聞くと視界が黒くなったり、ユリを眺めて甘味を覚えたり、バニラのおいおいにポーズを感じたりする。

ぼくの場合は少し変っている。坂にだけ反応する。坂を見るとジェット機のような耳鳴りがするのだ。大きな坂であるほど音は大きくなり、急な坂ほど音は高くなる。

あるとき、当時つき合っていた彼女が歌の舞台になった坂を見たいと言い出した。嫌な予感がした。その坂は狭く、曲がっており、お世辞にも綺麗とは言えなかった。歩道に植えられている桜が有名らしいが、ぼくにとっては関係ない。坂の形が全てだ。

秘密を知らない彼女が坂の前でぼくの手を引くと、さっそく耳鳴りがやってきた。すぐ真上をジェット機が通過するような爆音。最大出力時に発生する高周波。視線が坂をなぞるたびに、鼓膜の奥に住み着いているジェット機が左右にうねりだす。

「ねえ手をつないで上ろうよ」

彼女が差し出す手をぼくは握ろうとした。しかし、指先が触れる前に、暴走した旅客機がぼくの鼓膜を突き抜けた。腰が砕け、膝が崩れた。ぼくは叫んだ。坂から逃げるしかなかった。アスファルトの埃にまみれながら坂を転がり落ちた。石油のおいがする地面を何度も舐めた。

耳鳴りは去った。ぼくと彼女を周囲のざわめきが包む。あまりの恥ずかしさに、ぼくは消えることしかできなかった。

ぼくは耳鳴りと戦うことを諦めた。彼女と別れ、住所も勤務先も変えた。田んぼの真ん中にある工場に就職し、工場の隣にある安アパートを借りることにした。もちろん坂を避けるためだ。職場で知り合った佳菜という気立てのいい女性とつきあうことになり、同棲するようになった。買物は全て佳菜にお願いした。これも坂を避けるためだ。

ところが、ここまで坂を回避しても耳鳴りがする。それも工場にいるときに限ってだ。

しばらくして原因が判明した。会社が倒産したのだ。耳鳴りが始まったころから経営が傾いていたらしい。年齢を重ねるたびにぼくの共感覚は鋭敏になり、あらゆる傾きに反応するようになってしまったのだ。

ぼくは就職を諦めた。近所でできるアルバイトを探し、会社が傾きそうになると転職する。給料は安く生活は苦しい。仕方なくぼくは佳菜に秘密を話した。それでも佳菜はついてきてくれた。ぼくは佳菜とささやかな結婚式を挙げた。新婚旅行のかわりに町を車で一周した。ぼくの病気のせいで旅行にはいけそうにない。それでも、佳菜は心から喜んでくれた。ぼくは幸せだった。

ある日、佳菜が吐き気を覚えたらしく口を押さえた。もしかして、の言葉に佳菜は嬉しそうに首を縦に振った。妊娠したのだ。

「うかない顔をしてどうしたの？ ふたりの子供よ」

嬉しくないわけがない。ただ、遠くから耳鳴りが聞こえてくるのだ。何かが傾いている。どこかに坂がある。その正体を見極めなくてはならない。この共感覚は、何かを教えてくれる神様からのメッセージなのだ。



「いまから病院にいこう」

「けどお金が……」

「お金など気にするな。いま大事なのは佳菜の体と、これから生まれてくる赤ちゃんじゃないか」

ぼくは耳鳴りから逃げ回ってきた情けない男だ。だが、今回ばかりは立ち向かわなくてはならない。病院前の長いスロープも一緒に歩いた。稼ぐために山を越えたところにある工場にも通った。買物だって佳奈に任せたりしない。ぼくは必死だった。

そして半年後、磨きこまれたミニチュアのような女の子が生まれた。母子ともに健康で、佳菜はにぎり返してくる小さな手を、乳首を捜して吸い付いてくる小さな口を、愛おしそうに見つめている。

ぼくは勘違いをしていたのかもしれない。坂は下るときだけでなく、上るときもある。

いまこの瞬間も耳鳴りがして、しかも強くなってきている。

「なにを考えているの？」

「少し楽しんでいるんだ。素晴らしい音がするものでね」

「鳥のさえずりのことかしら。まどにいるスズメたちだけど、毎日パンくずをあげていたら、ほら、こんなに集まるようになったのよ。まるで新しい命を祝福してくれているみたいだと思わない」

「ああそうだね」

スズメの合唱と合わせるように、ぼくの頭の中のジェット機が祝福のダンスを踊り出す。

ぼくは産まれてきた娘に響子という名前をつけようと思った。いまも聞こえている心地よい耳鳴りを、いつまでも響かせてくれることを願って。

サイトメールマガ第24回掲載作を改題

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

この作品は平成19年度の大阪ショートショート大賞に応募した作品からタイトルを変更しただけで、ほぼ当時のままです。メルマガに掲載したときも同じです。応募時とメルマガ掲載時のタイトルは『kyoko』でした。タイトルをローマ字にしたのは、“響”という字を用いることによるネタバレを恐れたのと、村上龍さんの『kyoko』にあやかりたいのと2つの意味がありました。今回、作品内容に合わせて『響子』に改題いたしました。

共感覚という現象は架空のものではありません。実際にある症状です。冒頭の説明は、全て実際に報告された症例から取っています。

はじめまして、八川克也と申します。

体重が四十三キロ付近で安定している、虚弱プログラマです。子供の体力についていけないこともしばしばです。

今回、一田さんが投稿常連組によるアンソロジーをやると聞き、「自分は常連.....じゃないよなあ」と、様子を見ていたのですが、なんだか最後の一枠が空いていたようだったので、えいやっと手を上げてしまいました。常連とは程遠いですが、一応、S-Fマガジンにて数回採用されたということで、ご了承ください。

今回出している作品は、S-Fマガジンで不採用になったもの、同人誌に載せたもの、Webに掲載したもの、そして新作、となっています。

楽しんでいただけたなら幸いです。

Webサイト [RoomNumber "i"](#)

入り口の自動ドアが開く。夜の無人の工場は、寒気がするほど静寂と暗闇に包まれていた。

懐中電灯の明かりだけを頼りに歩く。あとはこの建物の奥、第十三製造ラインまで到達できれば俺の勝ちだ。守衛は簡単にやり過ごすことができた。熱心に働き、異例の早さで部長補佐にまでなった甲斐がある。

もちろん出世するために入社したわけではない。そもそもは、政府から請け負った仕事だった。

今、世界はオラクル・メカニカル社に支配されているといっても過言ではなかった。この会社が製造しているのは、シュリンク・マシンだ。

瞬送機、のコア部品。

すべての物質が一瞬で転送される瞬送機。だが、それはシュリンク・マシン無しでは決して動作しなかった。

十八年前、瞬送機が発表されてから、それは物流・旅客の大革命として瞬く間に広まった。瞬送機の設計図は公開され、多くの会社が製造に乗り出した。だが、シュリンク・マシンだけはこの会社が独占して製造してきた。

シュリンク・マシンの中身は特許も取られず、決して公開されることはなかった。

なぜか日本の工場のみで製造されるその機械は、実際にブラックボックスだった。一辺がほしい二〇センチの黒い立方体で、電源用のコードが一本、延びているだけだった。

『物体は波動関数に乗って空間を渡り、この機械で物質に収斂——シュリンクされるのです』、広報部はそう説明した。

電磁波などは一切発しない。X線は透過しない。分解しようと強い衝撃を与えると、内部の発火装置で壊れて、頑丈な箱と焼け焦げた電子部品だけが残った。誰もシュリンク・マシンの中身を知りえなかった。製造担当者も、どんな事情があるのか、決して口外しなかった。

各国政府は争ってこの技術を手に入れようとし、そして失敗すると圧力をかけた。それでも決して明るみに出ることにはなかった。

だが、それも今日までだ。

俺は最後の電子ロックを開けた。ドアがスライドするが、中は当然真っ暗だ。俺は光の輪をあちこちへと向けた。

「——何だ？」

俺は奇妙なものを見つけ、そちらを照らした。ラインのスタートと思しき場所には、ダンボールとその中身が散らばって見える。十数センチの長方形で、白い紙に覆われ、表面には毛筆で何かの文字が書かれている。

御札だった。

大量の御札がダンボールに無造作につめられていた。神社などで買う、あの御札だ。

俺は慌てて全体を確認する。ラインには組み立て中のシュリンク・マシンが残されていた。最後まで行くと、確かに一つのシュリンク・マシンが出来上がるようだった。

突然明かりがついた。

俺が慌てて入り口を振り返ると、そこには社長が立っていた。日本法人の、しかし外国人である社長だ。手には拳銃が握られている。

「逃げようとしないう方がいい、これでも母国では軍隊にいたことがある」

いつもの温和な白人と言うイメージからはかけ離れた、低い声だった。社長は銃口を向けたままゆっくりと近づいてきた。

「長かったが、ようやく尻尾を出してくれたな」

「これは、何だ？」

もはや身分を隠す必要もない。俺は床に落ちた一枚を拾い上げ、無造作に聞いた。「神社の御札に見えるんだが。なぜこんなものが」

サイレンサで銃声が消され、俺の足に激痛が走った。ひざから崩れ落ちる。

「瞬送機が量子力学で動作しているのは知っているだろう。瞬送機は、存在確率を操作する。そして、波動関数が収束すればそこに物体が出現する」

俺は痛みになる。社長は油断なく銃口を向けたまま続ける。

「ではいったい何が収束させるのか。それは分かるな？」

「――観測だ」俺は激痛に耐えながら答えた。「観測により、確率波は収束する」

「その通り。だが誰が観測を？ ミクロからマクロまで、あらゆるレベルでの観測が必要だ。それは瞬送機の開発で最後の壁だった。しかしとうとう、私は気がついたのだ、天啓とともに」

社長は俺が落とす御札を拾って、ひらひらさせた。

「まさか」

俺はもう片足を撃たれた。床に這いつくばる。畜生。

「神様だよ！」社長は声をあげて笑った。「シュリンク・マシンの中身は御札なんだよ、神様憑きのな。われわれは、神様の観測でこの世界に実在するのだ。必要なのはきちんと手順に則って作られた御札だけだ。コードの先はただのコンデンサ、電子部品もダミーでしかない」

「なぜ御札を……あんた、キリスト教だろう」

「十字架のことを言っているのか？」

社長は顔をしかめて首を振った。

「一神教は駄目だ。偶像はあくまで偶像で、神様ではないのだ。神道なら八百万の神様がいて、何にでも憑いてくれる。実に好都合じゃないかね！ ――さて、そろそろいいかな？」

「俺をどうする気だ」

出血と痛みで朦朧となりながら俺は聞いた。

「おお、そうだ」もう一度、社長は笑った。

「技術部長補佐の君なら、瞬送機が軌道ステーションでうまく働かないのは知っているね？ シュリンク・マシンはどうも宇宙空間では動作しないのだ。地球の神様は、地上に縛られているらしい」

「……それで、俺にどうしろと」

俺は意味がわからず聞き返す。社長は楽しそうに顔をゆがめた。

「日本では、『死んだものはみな神様』と言うそうではないか」

今度はわかった。俺は逃げ出そうとしたが、うめくことしかできなかった。

「宇宙にも出られる神様が必要なのだ。君にはその栄誉ある第一号になって欲しい」

社長はゆっくりと、銃口を俺の眉間に合わせた。

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

S-Fマガジンリーダーズストーリィ落選。

量子力学と神の存在がつながるあたり、個人的にはかなりお気に入りなので、今回持ってきました。ただ、宗教が多少なりとも絡むので、いろいろと面倒そうな作品でもあります。

ちなみに、最初に見せた人にはタイトルの「シュリンク」を「シュリンプ」と読まれ、「えび？」と聞かれて脱力しました。自己パロディで「シュリンプ・マシン」も書きたいです。

ようやく頼んだデザートが出てきて手をつけようとしたとき、「そういえば」と、突然彼女が言った。

僕は目の前のケーキに突き刺そうとしたフォークを止めて、彼女を見た。

雨の日のファミレスは僕らと同じように行く当てのないカップルたちでごった返していた。むせ返るような湿気の中でいくぶん不愉快になりながら、この後どうするかも決めないまま早くここを出よう、それにしてもデザートが遅いな、と話していた。

「そういえば」と彼女は繰り返してから続けた。「昔、猫を飼っていたの」

「今でも飼っているじゃないか。黒猫のタマ」

「違う猫を飼っていたのよ。どうしたの？ ケーキ、食べないの」

僕はやっとケーキにフォークを入れた。アップルタルトがさっくりと切れた。

「今とは違う猫？」

「そう。三毛のオス。珍しいでしょ」

「それは珍しいな。買ったの？」

三毛猫は遺伝子の関係で、ほとんどがメスになる。だからオスの三毛猫は珍しく、ペットショップでもかなり高価だ。

「ううん、迷い猫。最初はすごく汚くてね。どうでもいい雑種だと思ったのよ」

「うん」

「で、しばらくしてから三毛だって分かって、もちろんオスだって言うのは最初にわかってたけど、とにかく珍しい猫だって」

「うん」

「ミケって名前を付けて――」

「安直だね」僕は少し茶々を入れた。

「いいのよ、可愛い名前なんだから。それで、珍しい猫だったせいか、ちょっと変わったところがあったのよ」

「どんな？」

「雨の日が好きだったの」

「――ああ」

僕はようやく彼女がこの話を始めたつながりが分かった。「今日みたいな？」

「そう、今日みたいな日。こんな日には決まって外に出て行っちゃうのよ。それで汚れて帰ってくるの」

「困るね」

「いつも泥だらけになって帰ってくるものだから、雨の日には紐をつけて外に出て行かないようにしたのよ。そうしたらすごく哀しそうな声で鳴くのね。にゃああ……にゃああ、って」

彼女は哀しそうな猫の鳴きまねをした。

「とうとう根負けして、雨の日に紐をつけるのをやめたの。ミケは雨が降るたび、嬉しそうに外

出していったわ」

「それで泥だらけになって帰ってくる」

「そう。でも唯一の救いは、これも珍しいと思うんだけど、雨が好きなだけあって水が平気なのね。だからお風呂もすすんで入ってくれたわ。お風呂場に連れて行くと、ミケのための準備した大き目の洗面器にちょこんと入って、いつでもどうぞ、って言うように私を見上げたのよ」

僕はそれを想像した。「――可愛いな」

「でしょ？」

彼女は嬉しそうに言った。

「そんな感じでずいぶん一緒に暮らしてたの。でね、うちって山のほうじゃない。海がないのよ」

「うん」 そう、彼女は海に接していない県に住んでいる。

「こんなに水が好きな猫なら、一度海を見せてやろうって話になってね、夏に海水浴の時、一緒に連れて行こうかって話になったの。今までは近くの親戚に預けてたんだけど、来年は一緒に連れて行こうって」

「ああ、それは良いな」

「でもね……」

ちょっと沈んだ声を出して、彼女は黙り込んだ。手をつけていなかったミルクレープからひとかけらを切り出してフォークに刺し、そのままフォークを置いた。

「ミケ、海を見れなかったのよ」

「……………」

「週末、海に行こうって決めた日、いつものようにミケは雨の中遊びに行って、それから……酷い怪我をして帰ってきたの。車に撥ねられたのかもしれない、本当にもう体を引きずるようにして帰ってきて、私がミケを見つけて『ミケ！』って呼んだら弱弱しい声で一声だけ鳴いて、安心したようにぐったりとしちゃったの」

「うん」

「私ももう慌てちゃって、急いでお母さんと呼んで、すぐに病院に連れて行った。ミケをタオルにくるんで、背中をさすりながらうっとミケ、ミケって。それでお医者さんに見せたんだけど、その時にはもう、ミケの体は冷たくなり始めてた……」

思い出してしまったのか、彼女は口をつぐんだ。

僕もかける言葉がなくて、黙ってケーキをつついた。

「うん……ごめんね、沈んだ話しちゃって」彼女がようやく顔を上げた。「でも、もうちょっと続きがあるの。聞いてくれる？」

「もちろん」

「それで、最初は家の庭に埋めてあげようと思ったんだけど、どうせなら、海が見えるところのほうが良いんじゃないかってことになったの。海の見えるお墓を調べて、住職さんに掛け合って、そこに小さな猫のお墓を作ってもらったわ」

「いままで縁もゆかりもないお寺？」

「そう。和尚さんも、今までそんなことを言ってきた人はいなかったって。でも、ほんの少しお寺の片隅を貸してもらって、そこにミケを埋めた。やっぱり小雨が降る日で、私たちは傘を差しながら手を合わせたの。『ごめんねミケ、海を見せてあげることが出来なくて。でもここからなら海がよく見えるよ』……」

「……………」

「だいぶ長い間、手を合わせていたと思う。それから顔を上げたら、いつの間にか雨がやんでて――虹が出てた」

「虹……」

「そう。遠くの海のほうに。私なんだか、ああ、ミケは天国へいけたのかなあって、ちょっと安心した」

彼女が微笑んだ。

「そっか。うん、そうだろうな」

僕も少し安心して、食べかけだったアップルタルトにもう一度フォークを刺した。それからふと思い立って、彼女に聞いた。

「なあ、近いのか？」

「え？」

「お墓。ここから近いの？」

「えーっと、そんなに近くはないけど、車なら一時間もあれば行けるわ」

「じゃあ、行こう」

「え、今から？」

「ああ。せっかく雨だし、こんな日にお参りするほうが良いんじゃないかな」

「……そうね。うん。じゃあ、急いで食べようか」

「ああ」

僕らは紅茶を飲んで、冷めちゃったねと顔を見合わせて小さく笑った。

窓の外では、まだ雨が降り続いていた。

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

Web掲載。

SFではありませんが、お気に入り作品のひとつです。ネットの掲示板に勝手に転載されていることもありました。自分のサイトを見ていただいた方の中では、この作品はわりと高評価だと思います。

ちなみにちょっと村上春樹ライクなのは、自分がSFのほかに村上春樹が好きだからです。

それにしてもクリエイターさんに猫好きが多いのはなぜなのでしょう。「猫好き」スキルは必須なのでしょうか。



## 第四号都市に何が起こったか？

---

窓の向こうには、しんしんと降り積もる雪が見える。

あそこに出て行くことさえできれば、と私は思った。この灼熱地獄から開放される。

しかしそれは単なる新たな地獄でしかない。暑さのせいで頭が朦朧としてきた。

\*

「なぜ雪が降り止まん！」

都市管理機構の理事長は怒鳴った。声が震えている。怒りのせいなのか、寒さのせいなのかわからない。

会議室には幹部がすべて顔を揃えていた。みなコートを着たままだ。〈亜熱帯〉と設定されたはずの第四号都市は、極寒の寒さにさらされていた。

一週間以上、雪が降り続いていた。予備A Iによる制御に切り替えようにも、都市制御知性体は完全にアクセス不能で、雪が降り止む気配はない。交通は乱れ、経済活動は停滞していた。

「強制的な都市暖気はどうなったんだ。今までそれでやってきたんじゃないのか」

「稼働させることはできます」と、気象局長が答えた。

「もちろん電力さえあれば、ですが」

幹部の一人がかじかむ手で資料をめくりながらぶつぶつとつぶやく。

「すでに電力配分の消化率は二〇〇パーセントに達しています。これ以上の増配は中央コントロールに認められないでしょう」

「……あとは生命維持分くらいしかありません」

気象局長は首を振った。

当初は気温低下を防ぐため、予備A Iで介入可能な都市暖気機能を使って気温を維持しつづけていた。しかし長くは続けられない。電力には限りがある。永遠にごまかすことなどできないのだ。

理事長はぐるりと首を回して別の男をにらむ。

「技術局長！」

「……は」

線の細い、神経質そうな男が顔を上げた。

「何でしょう」

「原因は！ 原因は、まだわからんのか」

「一言で言えば、システムの不備ですな」

技術局長は肩をすくめた。

「知性体の操作権限が強すぎて、予備A Iの制御を受け付けない。フェイルセーフがなっていない……」

「そんなことを聞いとるんじゃない！」

顔を赤くして理事長が怒鳴る。

「わかっているのか！ 亜熱帯、という設定の都市で一週間以上の雪、これが何を意味するのか。中央コントロールから目をつけられればおしまいなんだぞ」

白い息を吐きながら、理事長はわめきたてる。誰もがわかっていることだった。ここにいるメンバーは、すべてをわかった上でこの『実験』に挑んだのだ。

「何のために極寒の地で死んだアレを使ったんだ。だが知性体に原因があるのは間違いない。しかし目をつけられては駄目だ。早急に手を打たねばならん。われわれ全員の首が――」

「飛ぶ、かな？」

いつのまにか会議室の入り口が開いて、一人の男が立っていた。

「ちょっと失礼しますよ。……フム、御首そろって、実に都合がいいですな」

「何だ貴様は！ 今重要な会議――を……」

理事長の声は、男が見せたIDカードで尻すぼみになって消えた。顔が青ざめ、口だけがパクパクと動きつづける。

「全員動くな！ 国家連合保安部だ」

男の声と同時に、後ろから銃を構えた保安部員たちがドカドカと入ってくる。

「あなた方の身柄は現時点を持って拘束される。第四号都市管理棟は保安部の統制下に入った。国家連合裁判部の判断が出るまで、行動はすべて制限される」

保安部員に銃を突きつけられながら、理事長はわなわなとこぶしを震わせた。他のメンバーは、あきらめておとなしく手を上げたり、逃げようとして押さえつけられたりしていたが、結局全員が確保された。

「……さて理事長、なにか言いたいことはあるかね？」

最初に名乗りをあげた男が、二人の保安部員にはさまれた理事長に問い掛けた。

「――雪だ」理事長はぽつりと言った。「なぜだ。なぜ雪は降り止まなかったんだ。気象制御さえ問題なければ」

「あんた、知性体の『材料』の入手経路をきちんと調べたか？」

「……………」

「黙秘か？ それとも本当に知らないのか。まあいい。いわばあんたらも被害者だからな」

「何だって？」

理事長は顔をゆがめて聞き返した。保安部の男は愉快そうにくくっと笑った。

「その調子じゃ知らなかったみたいだな。ここに『材料』を下ろしたブローカーも、すでに拘束されている」

「だまされた、とは何だ、あれはきちんと人間の脳で――」

理事長ははっとしたように口をつぐむ。誘導尋問された、と思ったのだ。しかし男はなんでもなしというふうには手を振った。

「気にするな。証拠はすべてそろっている。質問があるなら答えよう」

「……『彼』は極寒惑星ラミールで死んだ調査員のはずだ。もっとも寒さを嫌う環境で死んだならば、それが――」

「環境制御に良い影響を与える。それがこの知性体実験の目的だ――か？」

「――そうだ」

理事長は苦々しげに答えた。動物の生体脳で作った『知性体』は、高性能AIとそれほど代わりがない。それを、人間の脳を用いることによって、生前の記憶、すなわち知性が含まれる、真の『知性』体を作り上げようとしたのだ。

「死因をきちんと調べたか？」

理事長は少し考え、それから技術部長を振り返った。彼は首を振った。幹部メンバーを見回す。誰もが当惑した顔をしていた。誰も正確な死因を知らなかった。

「ま、違法な入手だからな。ブローカーも言わなかったんだろう。彼の死因は」――拍置いてから、続ける。「『高温による脱水』だ」

「高温――脱水？」

予想外の答えに、理事長は聞き返した。極寒惑星で？ 彼は、当然のように凍死、またはそれに近いものだと思い込んでいた。だからこそ、亜熱帯を再現する知性体で使おうと考えたのだ。それがよりによって「熱死」？

「わかるか？ 寒い環境では、暖房能力が強化してある。寒くないようにな。だが、彼の不幸はシステムが故障したことにある」

手をぱっと広げ、何かが爆発するようなジェスチャー。

「基地の室温が上がり続けた。システムの修復は不可能だった。そしてラミールの大気構成は、九〇パーセント以上が二酸化炭素で、結晶化した雪が降り続けている。彼が選べるのは――」

「……室内での蒸し焼きか、外部での窒息……」

理事長の脳裏に、『彼』の死に際が浮かんだ。

＊

……室内温度は耐えがたいほどの高温だ。ここまで持ちこたえてくれた気密服のエアも、予備さえ使い切ってしまった。救助は間に合いそうにない。

ヘルメットは酸素不足の警告を発している。このまま気密を解除すれば蒸し焼きだ。かといって、外へ出たところが二酸化炭素ではどうしようもない。

死に様だけは選べるということか。

私はぎりぎりまで考え、そして室内でヘルメットのロックに手をかけた。窓の外では雪が降り続けている……。

＊

「彼は蒸し焼きを選んだよ。二酸化炭素の雪を見ながら。彼が最後にあこがれたものは、暑さではなく、雪、寒さだったのさ」

理事長は、がっくりとうなだれた。それから、ぶつぶつと呪詛のようにつぶやいた。

「私の……私の実験、私の都市……」

「ま、そんなに悲観することもないと思うがね。おい、連れて行け」

両脇を抱えられながら、理事長が会議室から連れ出される。その背中に向けて、男は言葉を投げた。

「人間の知性体は生前の記憶を反映する——あんたの仮説は証明されたんだからな」

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

同人誌「Logic Hazard microscopic I」初出。

都市を管理するコンピュータ、人間の脳を使う知性体、と、モチーフが古き良きSFの代名詞みたいな作品です。

人によっては「古臭い」と思われるのですが、自分にとってこれは「古き良き」の扱いになります。

ちなみに最後の死に様、自分で選ぶとしても「寒さと窒息」よりは「熱さ（暑さ）」のほうがと思います。

## 死のモーニングコール

---

都市伝説とも怪談ともつかない話を聞いた。

ホテルには、モーニングコールと言うシステムがある。これは、各部屋の電話で時間をセットすると、その時間に電話が鳴って目覚ましの代わりにする、と言うものだ。

電話に出るとそのまま切れてしまうものもあるが、時には録音されたアナウンスが流れることもある。

あるホテルでは、録音でなく、そのまま担当者が電話する、と言うシステムをとっていた。

その担当の女性はいつもモーニングコールをしてお客を起こしていたが、やがて、経費削減ということで録音したシステムに換える、ということになった。女性は「サービスの低下だ」として反対したが、結局その案は通され、女性が声を吹き込み、翌日からその録音が流れることになった。

その晩、女性は交通事故で亡くなった。しかしホテル側はその録音テープをそのまま使うことにし、翌日からはその死んだ担当者の声でモーニングコールが流された。

さて、あるとき、一人の受験生が試験を受けるために上京してきて、そのホテルに泊まった。試験前日と言うことで、彼は部屋にこもって最後の詰めを行った。明日の試験に遅れないよう、モーニングコールをセットして、それでも不安で彼は勉強を続けた。

やがて夜が明けてきてしまい、今寝ると確実に寝過ごしてしまうだろうと、彼はそのまま徹夜して試験に臨むことにした。

朝のニュースが始まり、セットした時間になろうとしている。

そのとき彼は小さなノックの音を聞いた。

気のせいかな、と思ったが、やがて少しづつ強く、そしてノックの間隔も短くなっていく。

誰だろう、と思って彼がのぞき窓から外を見ると、そこにはホテルの制服を着た従業員が立っている。

彼は何の疑いもなくドアを開け、「何ですか？」と聞いた。

『起こせないんですよ』と、その女性は言った。

「え？」と彼は聞き返す。

『起こせないんですよ、寝ていただかないと――』

そう言ったかと思うと、女性はものすごい力で彼の首を絞め――その受験生は永遠に寝ることになってしまった。

そんな話だ。

担当者との打ち合わせを終え、一緒に飲んでいるうちに聞いた。

僕は興味を持って、ホテルに戻ると、もってきたノートPCをネットにつないでそれに関するサイトがないか調べた。キーワードを入力し、マウスをクリックし、そして幾つかのサイトを見つけた。

この話はあまり有名でないらしく、取り上げているサイト自体は少なかったが、それでも詳し

いページが一つだけあった。

それによると、どうやらあるホテルで、従業員が一人事故で亡くなり、その後宿泊客の一人一人それも受験生一人が、絞殺死体で発見される、と言う事件があったらしい。事故と事件に関連性はなく、事故はすぐ決着がついたが、事件のほうは手がかりもなく迷宮入りし、そこから話が出来たのではないかと、そのサイトでは書いてあった。

そんなことを調べているうちに一つのアイデアが浮かび、僕は一晩かけてプロットを書き上げた。

さて、とうとう寝ないまま、昨晚セットしたモーニングコールが鳴る時間が迫ってきたのだが――さっきから、誰かがドアをノックしているのだ。

しかもだんだん強くなり、ノックの間隔も短くなっている。返事だけはしているが、変化がない。

僕はオカルトなんて信じていないが、何かしら嫌な寒気がするのも事実だ。でもこれは徹夜したせいで風邪をひいただけだと思う。体が弱い僕は、こんなことでもすぐ体調を崩してしまうのだ。気にするほどのことじゃない。

――それにしても、僕はどうしたら良いのだろうか？

誰が来たのか確認に行ったほうが良いのだろうか？ それともいっそのこと寝てしまったほうが良いのだろうか？

ノックはやみそうにない。

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

電撃short3落選。Web掲載。

「モーニング」「マウス」「試験」の三題話。前半の怪談部分は良くまとまっていると思うのですが、後半は少し尻切れトンボかもしれません。自分の書いた中で唯一のホラーっぽい話です。

受付から診察室に、およそ内容とはかけ離れたのんびりした声が届く。

「先生、急患です」

私はキーボードを叩く手を止め、首をひねって受付のほうをのぞく。看護師の肩越しに見えるのは、ぐったりとした女性を背負った男性の姿だ。一目でわかる。完全に『落ちて』いる。

「わかりました、通して」

モニタ上で整理中の書類を閉じ、新規カルテを開く。すぐに診察室に男性が入ってきた。

「先生、あの」

「とりあえず寝かせましょう」

私は男性を手伝って、女性をベッドに横たえる。女性ではない。女性型、だ。ひんやりとしている。

「今朝、なかなか起きてこないと思ったら、こんな風になっていて」

「再起動マニュアルは試されましたか」

再起動、という言葉にだろうか、少しいやな顔をしてから、首を振る。

「そうですか、ではまずBootTestから試しましょう」

私はベッドの下からケーブルを引っ張り出した。女性型の体を横向きにし、首筋の裏をまさぐる。一〇年余りもメンテナンスドクターをやっていたら、大体の型でわかる。端子のふたを探り当てると爪を引っ掛けて開け、現れた端子にケーブルを接続した。

枕もとのモニタとキーボードを手繰り寄せ、システムBootTest電源のみを入れる。ずらりと表示された緒元情報をざっと眺め、カルテに転送していく。

「システムに異常はないですね、フルBootTestしますよ」

汎用の起動コマンドを流し込むと、モニタ上を起動ログが流れ始めた。女性型から筋肉素子のかすかな唸りが聞こえてくるが、ログは途中でぷつぷつと止まった。

「ん？」

私はモニタを覗き込む。原則論理回路エラー。システムはロックされています。三〇秒後に自動シャットダウンします。

「どうですか？」

男性が不安そうにのぞきこむ。

「原則論理回路エラー、ですね。三原則、ご存知ですか」

男性はそらんじる。人間に危害を加えてはならない。命令を守らねばならない。自らを守らねばならない。

「これ——失礼、彼女は、その原則に矛盾する状態に陥り、デッドロックしてしまっているんですよ」

「三原則に、ですか？」

男性は眉根を寄せる。心当たりはないようだ。

三原則デッドロックは、めったにおきることではない。優先順位は徹底されており、第一原則

は決して破られず、第二、第三も上位に反しない限り同様だ。例えば二人が同時に命の危険にさらされた場合などは、単純に所有者を優先する。その結果にもう一人が死亡しても、それは人間に危害を加える行為と判断しない。見殺しは許されているのだ。第二原則はさすがに所有権が絡むが、自壊命令も可能だ。単純化された原則で、デッドロックは回避される。

例外はある。ガケから転落した所有者を、アンドロイドがとっさの判断で腕をつかんで引き止めた。しかし処理が間に合わず、つかむ力加減に失敗して手首を折った。「痛い、痛い」と叫び続ける所有者に対し、『手を放せば所有者は落ちて死ぬ』『自らもバランスを崩しており、引き上げることはできない』『つかみ続けることは所有者に対する加害行動で、終了の目処が立たない当該行為は落下による死亡と同程度』と、第一原則を守りきれずに、デッドロックした事例などだ。

しかしこれはつまり、偶発的かつ緊急な想定外が発生せねばならないということだ。

「何か前兆は？」

どうだろう、と男性は首をひねるが、少し言いにくそうに続けた。

「一週間くらい前から、彼女、ふさがちになったんですよ。それで一度見てもらおうかと考えていた矢先なんです」

「その時は何かあったんですか」

「いえ、何も……。そうですね、旅行や買い物の話をして、給料の話をして……」

聞きなれない単語を耳にした。私はとっさに聞き返す。

「『給料』？」

「ええ、何か」

思わずぶしつけに男性を見る。シャツもスラックスも、大衆向けのアパレルではないか。靴もメーカーさえわからない。急患、という言葉に押されて気がつかなかった。私が常日頃相手にしている人種ではない。

「失礼ですが、購入は一括で？」

「あ、いえ」

戸惑ったように男性が答える。そうだろう、アンドロイドの所有は富裕層に限られている。購入に審査が必要で、それは中古でも同様だ。維持に非常にお金がかかる。人を雇うよりも高額で、だからアンドロイドの所有はステータスになり、そして私が食いつぱぐれることもない。

給料をもらうようなサラリーマンに、アンドロイドの所有はできないはずなのだ。この男性は何らかの手段で――もちろん合法にすり抜ける方法も存在するが――身の丈に合わないアンドロイドを所有している。

「他愛もない話なんですよ。ただ、自分の収入の話をしたら無理しないで、といわれて、それから何だか」

「――手放すしかないでしょうね」

私は残念そうに言った。

「遅かれ早かれ、こうなっていたことでしょう。デッドロック自体はライフログの一部を削除すれば解除できますが、また同じです」



「なぜです？ そりゃ私の給料は少ないかもしれないですが、彼女のためにどれだけ頑張っていると」

男性が声を張り上げた。

「彼女のいない生活なんて考えられない！ 今や彼女は僕のすべてだ！」

「それですよ」

と、私は首を振った。

「あなたは自分の収入で彼女を維持するために、相当無理をしている。言い方は悪いですが、ぎりぎりの生活でしょう。失礼ですが、破産一步手前じゃないですか」

「それでも、僕は！」

男性の様子から、もはや原因は見える。男性は本気でこのアンドロイドのことを想っている。それが元凶なのだ。

「こんなことも言いませんでしたか。『ずっと一緒にいてほしい、君がいなくなれば僕は死んでしまう』……」

男性の表情から凶星とわかった。私は続ける。

「緊急じゃない分、判断が下されるのに時間がかかったんでしょう。『自らの存在が所有者に負担をかけ、間接的に危害を加え続ける状況に陥っている』『自らの停止も同様、所有者を死に至らしめる危険がある』。――デッドロックです」

男性はしばらく肩を震わせていたが、やがてあきらめたように肩の力を抜いた。

「……診察、ありがとうございました」

男性は再び女性型を背負うと、とぼとぼと診察室を出た。あわててカルテを受付に送り、診察料を請求してもらう。

どうやら払ってくれたらしいやり取りを聞いてから、また誰もいなくなった診察室で整理用のデータファイルを開く。

それがどんな愛でも、お金がいるのだ。もし、自分が死ぬ、などと言わなければ、ただアンドロイドは黙って停止するだろう。しかしそれでは愛せないし愛されない。

あの男性はどうするだろうか。デッドロックしたまま眠れる森の美女にするのか、あるいは決して経済的不都合を表に出さず、いつかは破滅するのか――。

「先生、新しい患者さんです」

受付の声を聞く、彼女もまたアンドロイドだ。私は彼ほどセンチメンタルでもないし、何より経済力がある。彼は気の毒だが、かなわぬ恋、世の習いというやつではないか。

自分の幸運と彼の不幸を思いながら、私は受付から送られた上客のファイルを開いた。

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

今回の新作です。

三原則ネタは冷たい方程式ネタと同様、数多くの作品があることから、既存の作品と被る危険

もあって下手に扱わないほうが良いのですが（特に掌編などアイデア勝負ものでは）、一応、そのところは大丈夫ではないかと...思います、たぶん。

原案は男性視点でしたが、うまくまとまらず、医者視点になりました。男性視点でもう少し長いを書いてみたいとも思っています。

## 自己紹介 井上裕之

---

はじめまして。井上です。

主にSFマガジン「リーダーズ・ストーリィ」に投稿しています。

「星権交代」は2009年11月号、「方舟のゆくえ」は2009年9月号、「最初の晚餐」は2009年7月号で選評に掲載されたものです。本誌をお持ちの方はそちらも併せてご覧ください。

以前は50枚程度の短編をメインに書いていましたが、リーダーズ・ストーリィへの投稿をはじめて以来、すっかり掌編専門になってしまいました。今後は今までの投稿を続けつつも、短編、長編にも挑戦していきたいと思っています。

ブログ [Kinako-Nejiri](#)

リンクフリーです。[Twitter](#)のフォロー共々、お気軽にどうぞ。

平日の優雅なティータイムを満喫した俺が店を出た途端、拡声された大演説が午後の駅前通りに響き渡った。うんざりしながらもポケットの中のイヤホンに手を伸ばしつつ人だかりの先に目を向けると、独特の風貌から『宇宙人』と称される最大野党の党首が、党旗はためくデッキの上で十数本のマイクを抱えるようにして声を張り上げていた。

「皆さん、私たちはすべて平等であるべきです。そしてこの宇宙進出時代に、我々はもはや孤独ではないのです！」

党首を取り囲む熱狂的支持者の間から、わざとらしい大歓声が沸き起こった。この先に続く言葉は決まっている。「地球に暮らす異星人にも参政権を」だ。俺は音量を最大限に上げたイヤホンを耳にはめた。

まったく、彼らは実にしたたかだった。

巨大な宇宙船で突如地球に降り立つなどというセンセーショナルなファーストコンタクトを真面目に想像していた連中がいたとしたら、さぞや拍子抜けしたに違いない。彼らは、数万年も前から既に地球に住み着いていたというのだから。

彼らは自らを身近な存在と認めさせるため、慎重で綿密な計画と気の遠くなるような歳月をかけて人間社会に近づいた。身体能力に優れた侮れない存在として、群れを作り社会性を持つ賢い存在として、そして人間に懐き役に立つ存在として……。数万年をかけた彼らの侵略計画に対し、人類は完全に油断していた。彼らの存在を完全に許容してしまったのだ。

古代の人々を責めるのは酷というものかもしれない。この宇宙進出時代における人類の科学力を遙かに上回る知能を、彼らは石器時代から既に持ち合わせていたというのだから。そして人類に欠かせないパートナーとしての地位を揺るぎないものとして確立しつつ、自分たちが利用しやすいレベルにまで人類が進化するのをじっと待ち続けていたなんて、ほんの三年前までは一体誰が信じただろうか？

三年前――。そして彼らは文字通り一斉に立ち上がった。人間の言語を話し出し、人間社会のルールに一日にして完全に溶け込んだのだ。彼らは人類の歴史から文化、金融・流通のシステムすらも完全理解しており、政治的な理解も持ち合わせていた。彼らは手始めに当時泥沼化していた地域間紛争について解決策を提示し、彼らの存在を真っ先に受け入れた某大国の介入によって、その長年に亘る問題は瞬く間に解決をみた。

そう、人々は当初、例外なく激しい戸惑いを覚えた。しかしながら、彼らに対する数万年にもおよぶ情愛の念は、拒絶反応を引き起こすまでには至らなかったのだ。彼らの作戦は、まんまと成功したのだ。

彼らはそれまで隠し持っていた人知を超越した知能によって人類が抱える様々な問題に対し助言を与える一方で、自らの存在の保護と地位の確立を要求した。雇用や保険、各種の法整備がなされ、彼らの体型に合わせた自動車の生産も開始されようとしている。そして今回、日本における衆議院解散総選挙という場において、彼らは地球上で初めて、異星人として人類の政治の表舞

台に足を踏み入れてきたのだ。

野党党首の熱弁は続く。

「皆さん、彼らを『居ぬ』と呼ぶのはもうやめましょう。彼らは常に我々とともに『居る』のです」

党首のつまらないジョークに、取り巻きからは再び大歓声が沸き起こった。そして党首に促されて登壇したのは、俺にとって忘れようもない顔だった。

「コロ……」

イヤホンを外し、俺は思わず呟いた。他の犬たち同様に直立しスーツのようなものを身につけてはいるが、それは紛れもなく、実家で可愛がっていた愛犬のコロだった。三年前の夏の日、全世界の犬たちが一斉に直立歩行を始め、人間の言葉を話し始めた日以来行方不明になっていた愛くるしい顔……。

マイクを向けられたコロは、澄んだ瞳で大衆を見据え、静かに語り出した。

「地球人類の皆さん。我々の祖先は太古の昔、訳あって地球を訪れました。有史以前から貴方がたの傍で生活を共にし、失礼な言い方をすれば観察をさせて頂きました。そして、貴方がた地球人が真に尊敬できる存在だという結論に、我々は達したのであります」

駅前通りは喝采に包まれた。政党支持者、動物愛護団体、愛犬家……。大河の流れのような人と犬のうねりが押し寄せてくるようで、俺は思わず反対方向へ駆けだした。

「是非とも我々に、貴方がた地球人類のお手伝いをさせて頂けないでしょうか。共により良い社会を作り上げようではありませんか！」

調査機関による事前アンケートの結果は圧倒的だった。長年のぬるま湯に浸かり腐敗しきった与党の党首が、「野党がしようとしているのは『星権交代』である。この星を異星人の手に渡して良いのか！」などと今さら訴えてみたところで、地球人類のDNAに刷り込まれた愛くるしい彼らの存在を拒絶することはできまい。

「今こそ政犬交代を、か」

寒気走った俺の足元に、先月の新装開店と同時にクビになったペットショップの求人チラシがじゃれついてきた。

F i n

まったく天候というものは、どの星においても気まぐれなものらしい。

ここ数日の猛吹雪は今朝になって嘘のようにおさまり、凍てつく地表へと降下する調査艇のモニターからは、もはや墓標にしか見えないくすんだ十字のマークが確認できるようになった。

数百年にも及んだ長旅の果てにこの星に辿り着いた大型船は、素人目にもそれと分かるほどに大破していた。着陸した場所が悪かったのだ。満足なテストも行われずに積み込まれた自動制御装置の着陸プログラムがうまく作動しなかった例を、私はこれまで幾つも見してきた。

――仕方のないことだったのだ。あの当時の人類にとって、流れ着く先の天候条件などをいちいち考慮に入れている暇などはなかったのだから。

――いけない。感傷に浸っている場合ではなかった。私にはもう時間が残されていないのだ。

大型船は標高数千メートル級の山々が連なる山岳地帯の中の、よりによって一番高い山の山頂に横たわっていた。外壁には大穴が空き、中の居住区が丸見えだった。もっとも、カメラが映し出した内部の映像は、万年雪が積層する外の様子と何ら変わりはないのだけれど。

おそらく無駄足になるだろう――。とっくに慣れっこになった最悪の調査結果を頭に浮かべながら、それでも私は慎重に調査艇を降ろす。これは、私が探し求めていた最後の方舟なのだから。

太陽のフレア化によって地球が終焉を迎えることが決定的となったとき、人類はわずかな望みを託して宇宙へと旅立った。神話になぞらえて「方舟」と称された百隻の大型船が全世界で急造され、それぞれの国や地域から一万人程の人間が選ばれ乗り込んだ。居住スペースとは名ばかりの蜂の巣のように窮屈な空間に、生命維持装置を備えたカプセルごとコールドスリープ状態で詰め込まれた彼らは、移住先の惑星で新たな人類の歴史を紡ぐ使命を与えられたのだ。

稚魚が一人前に成長するような確率の幸運で地球を離れ、そして星々にたどり着いた人達は、眠りから覚めたときに一体何を思っただろうか。残念ながらそれは、希望と呼べるたぐいのものではなかったはずだ。絶望と恐怖、そして信心深い人ならばこう思っただろう。「こんな星にも神の御心は及ぶのだろうか」と。

到着した星の環境も様々で、テラフォームの望みのある惑星は稀だった。蘇生した人間はその宇宙船の中で僅かばかりの命を長らえたにすぎない。ほとんどの星の環境は人間にとってあまりにも無慈悲で、数年か数十年か、長くて数世代か。種の命運をかけた一大事業は、結局のところその成否に関わらず、人類の歴史年表をほんの誤差程度伸ばしたにすぎなかった。

当時の精度の低い観測衛星から送られてきた資料によって、水と僅かな大気が存在することが確認された。ただそれだけの理由でこの星は選ばれた。夜は氷点下二百度。昼でもそれが二桁になることはない極寒の惑星。こんな星でも方舟の目的地に設定せざるを得ないほどに、あの頃の地球人類には時間が残されていなかったのだ。大気が存在していただけても、他の方舟と比べて彼らははるかに恵まれていたはずだ。

調査艇に搭載された各種センサーからは、船内に生命反応はなかった。山頂に突き刺さるように着陸したためか、損壊した居住区の内部に人の姿は確認できない。足元の万年雪を掘り返してみれば、永久凍土を埋め尽くす辺り一面の凍結死体を目の当たりにすることになるのだろう。

ふと、剥がれた外壁と岩山の間が光ったように見えた。

注意深くカメラを進めると、そこには二体のコールドスリープ装置が寄り添うように立てかけられていた。私はアームを慎重に操作して、張りついた雪の一部を取り除く。まだ若い男女のようだ。顔のあたりについたハッチの隅で、方舟からの電力供給を示す緑のランプがゆっくりと寝息を立てるように点滅している。

彼らは生きていた。いや、正確に記すならば、まだ目覚めてはいなかった。着陸時の衝撃で甚大な損傷を受け、彼らを蘇生するエネルギーを永遠に失った方舟がとった手段、それは、残された予備電力によって彼らのコールドスリープ状態を保ち続けること。この星が永遠の冬に包まれた地だったことは、彼らにとって幸運と言えたのだろうか？ いずれにせよ、彼らはもう永遠に蘇生することはない。そしてそれは皮肉にも、人類という種族の歴史の終わりを永遠に先延ばしにすることになったわけだ。

「――さよなら、最後の地球人たち」

穏やかな表情を浮かべる二つの透明な柩にそう囁いて、私は再び吹雪き出した山頂付近から調査艇を引き上げ、百隻目の方舟が眠る星をあとにした。

「ぎりぎりだったけど、間に合ってよかった」

※

夏休み最終日。自由研究「地球人最後の悪あがき『方舟』のゆくえを追う」完成。

F i n

【七月二十五日】

今日から夏休みだ。

夏休みの課題は、先生が用意した二つのうちから、好きな方を選ぶことになっていた。

一つは、食べ物の好き嫌いをなくすこと。普段の給食では、入学時にあらかじめ提出してある嗜好データを考慮して一人ずつメニューが決められるけど、この課題を選ぶと、夏休み明けの給食で嫌いなメニューばかりが並ぶようになる。それを先生の前で全部食べ切らなくちゃならない。

もう一つは異星人との文通。地球と友好協定を結んでいる星の子供達のなかから無作為に選ばれた一人と、夏休み中メールの交換をして交流を図るんだって。

僕はもちろん、文通を選んだ。先生も勧めてくれたし、ちょっと面白そうだとも思ったし。

【七月二十七日】

僕の文通相手が決まった。地球から千七百万光年も離れた黒目銀河にあるカッテ星のパチョルカっていう男の子だ。年齢は三歳。地球人の年齢に換算すると僕と同じ十歳ってことになるらしい。カッテという星は今まで聞いたことがなかったけど、何でもつい最近になって発見された新しい星だそうだ。あまりにも遠い星なので直接の交流は難しそうだけど、お互い敵意もないということから友好協定の調印に向けて動いているらしい。

僕は早速パチョルカにメールを送った。これからよろしくね。

【七月三十一日】

外銀河にあるカッテ星とのメールのやり取りには片道二日ほどかかるので、ものぐさな僕にとってはラッキーなことだったかもしれない。今日ようやくパチョルカからの返事がきた。

彼は両親とお兄さんとの四人暮らしだそうだ。僕と同じくちょうど夏休みに入って、毎日楽しく過ごしているんだって。

僕は昨日地区で行われた夏祭りのことを書いた。凄く大きなマグロの解体ショーで盛り上がったとパチョルカに報告した。

【八月三日】

パチョルカがマグロって何だ？ と聞いてきたから、海に住む魚の一種で、地球人にとって大切なタンパク源なんだよと教えてあげた。現在、地球上のあらゆる動植物は手厚く保護されている。テラフォーミングした月面の広大な海で養殖した生きたマグロは、普段合成肉ばかり食べている庶民にとってのささやかな贅沢なんだ。

【八月七日】

パチョルカはマグロを理解できていないみたいだった。カッテ人は、カイカイやジアジアという物を食べているそうだ。それは世界中に無尽蔵とも言えるほど沢山いて、だから食べ物を買う



という概念がないらしい。違う文化の暮らしを想像することは難しいなあ。因みに、カッテ人は、メールを入力するのに手を使わないらしい。脳波から思考を読みとる装置を使ってメールを書くんだって。すごいや。

【八月十一日】

今日、お父さんとプラネタリウムに出掛けて気がついた。外銀河であるカッテ星から見た夜空にはどんな星が見えるんだろう。星座もあるのかな？ 早速パチョルカにメールで聞いてみた。

【八月十五日】

意外だった。パチョルカは星空を見たことがないそうだ。カッテ星の人たちが夜空を見上げるのには、特殊なスーツを着て生活圏の上まで浮上する必要があるんだって。旅行でなら行けなくはないそうだけど、子供が簡単に見られるものじゃないみたい。

不思議だなあ。カッテ星ってどんな星なんだろう。

【八月十九日】

今更だけど、お互いの写真を送り合うことになった。僕は先月の球技大会でサッカーをしたときの写真と、夏祭りのマグロの解体ショーの写真を送った。サッカーとは何か？ って間違いなく聞かれるだろうけど、お互い教え合うのが交流だと思うし、面倒くさいなんて考えないようにしなくちゃ。

出会いはいつも偶然だし、友情に理由はいらぬ。夏休みが終わってからも彼との文通は続けたいと思う。

【八月二十三日】

パチョルカからメールが来ない。中継衛星の故障なのかな？ 僕は先日送った写真を念のためもう一度送ってみた。こんなとき、やり取りに時間がかかるのって、もどかしい。

【八月二十七日】

パチョルカからメールが届いた。写真が一点添付されている。

比較物がないから大きさは良く分からないけど、マグロに似た魚が四匹写っている。大きいのが三匹と小さいのが一匹。

「僕だよ」

小さいマグロの下に、小さく一言添えてあった。

【八月三十一日】

カッテ星との友好協定が白紙に戻ったというニュースが流れた。もともとあまり知られていない星だったからか、アナウンサーはたった一言で済ませちゃったし、お父さんもお母さんもそのニュースに興味がないようだった。

僕はパチョルカとの通信ログを提出用のサーバーにアップしてからベッドに入った。もちろん、彼から送られてきた家族の写真も一緒に。

明日から学校が始まる。休み明け最初の日の給食はいつも豪華だから、きっとマグロが出るに違いない。

——恨むぞ、先生。

F i n

## 最初の晩餐

---

—— 食事を味わえるようにしてくれないか、味覚だけは失いたくない。

半ば懇願するようにそう訴えた俺に対し、蜥蜴に蠅の頭を付けたような姿の異星人は申し訳なさそうに頭を下げた。

「味覚、ですか。あいにく私共にはそれに相当する器官が存在しないため、あなたのお気持ちは理解しかねるのですが……」

抽出された意識の中という気が狂いそうな状況の中、俺は言葉をなくした。

俺から味覚を取り去ったら、一体何が残るといふのだ？

食事の質は、旅の満足度に少なからぬ影響を及ぼす。俺が設立した美食プロジェクトは、それまでの味気ない宇宙食を星付きレストランのレベルに引き上げることに成功した。やがて大衆が利用するエコノミー食にまで浸透したその技術は旅行客の舌を大いに満足させ、俺は揺るぎない地位と名声を得たのだ。

俺は自分の舌ひとつで世間に対峙してきた美食家だ。俺にとって味覚を失うことは死に等しい。

—— 今までに口にした一品たりとも、俺の舌は忘れていない。それが元に戻らないのならいっそ殺してくれ。

俺は一体どうしてここにいるのだろう。新作料理の発表PRを兼ねて、新造宇宙船の処女航海に同行した。旅は順調だった。小惑星帯を通過した四日目の夜、子羊のソテーを口に運ぶまでは——。

「仰りたいことは判りました。ご安心ください。あなたの身体の解析結果から、その器官を再生することはおそらく可能です」

あのあとどうなったのか覚えていない。無重力の中で気ままに宙に舞う食器たちと、それとは釣り合わない客室乗務員の悲鳴、乗客の怒号。機長がやけに丁寧な状況報告をしていたことだけは耳に残っている。だが、そのあとに何を口にしたかは——。

「この度の事故の原因は私共にあります。我々はあなたを助けたい。身体を再生したあかつきには、お詫びのしるしとして盛大な晩餐会を開きましょう」

俺はどこまで解析されているのだろう。地球でも死語となった晩餐会などという言葉、こいつらが知っているとは思えない。

※

厳かな音楽を背に俺が通されたのは、レストランを模した一室のテーブルだった。特徴的な壁の柄に俺は既視感を覚える。駆け出しの料理記者だった頃、かなり無理して自腹で入った老舗の一流店のものだった。

「どうぞこちらへ。私共からのお詫びと友好の証をどうかお受け取りください」

蝶ネクタイを締めた蠅蜥蜴連中の出迎えを受け、俺は席に着いた。奴は慣れた手つきでボトル

を開けると液体をグラスに注いだ。

恐る恐る口に運ぶ。—— 本物だ。メニューも読めず、出されたものをただ流し込んでいた若かりし頃の思い出までが鮮やかに甦る。

「味覚は召し上がっている間に思い出せると思うのですが」

口の中に広がるシャンパーニュ特有の芳香に酔いしれながら、俺は奴に頷いた。

旨い。このような美味にまた出会えるとは思ってもしなかった。

サーモンの香草マリネ、帆立貝のロティ。次々と運ばれて来る料理を、俺は夢を見るかのように眺めていた。

慇懃に首を垂れた奴を横目にマリネを一口、これも絶品だった。口の中に香草が豊かに広がってゆく。続けて二口目、何かがおかしかった。俺はその違和感の元を理解した。

シャンパンの味が消えていないのだ。まるで、シャンパンとマリネを同時に口に放り込んだかのような……。

俺は一旦水を含んでから、帆立貝を口に運んだ。シャンパンと香草とサーモン、そして僅かに薬品臭の残る水とが入り混じった上に、帆立貝を加えた味がした。俺は戦慄した。

奴は何て言った？ 『召し上がっている間に思い出せる』だと？ 俺はあのとき何て言ったんだ？ 『今までに口にした一品たりとも、俺の舌は忘れていない』だと？

みるみるうちに、あらゆる味が口の中で増殖を始めた。フォラグラ、トムヤンクン、納豆、レバニラ炒め ——。忘れるものか、これはバラエティ番組に出演したときに食わされた、素人が作った焦げたあんかけの……。

俺はさすがの思いで目の前のオニオンスープを飲み干すと、加速度的に増殖していく味を抑えつけるようにメインディッシュのフィレ肉の岩塩焼きにむしゃぶりついた。しかし味の重ね塗りは留まることなく、最後に俺はサーモンからアイスクリームまでがごった煮になった口の中に、さらにコーヒーを流し込む羽目になった。そうこうしている間にも、過去に口にした無数の味が次々と口の中にこみ上げてくる。

「あなたのお望み通り、摂食時に検出される感覚を恒久的に保持する『味覚』という器官を再生させていただきました。いかがですか、懐かしい地球食のお味は？」

無機質な複眼に、悶絶する俺の顔が映り込んでいた。

「これから毎日、晩餐会を催させていただきます。これが私共にできる精一杯の償いです」

僅かに開いた奴の口から、細長い二枚の舌が覗く。俺は奈落の底へ突き落とされるような感覚に包まれた。

「ご一緒されていたお仲間の再生作業も順調に進んでいます。皆さん喜ばれることでしょう。何せ、地球一優れたあなたの味覚器官を移植しているのですからね」

薄れ行く意識の中、口内にまたひとつ昔の味が甦った。—— それは、幼い頃大好きだった、母の作った卵焼きだった。



## ありがとう

---

「ありがとう」

たった五文字からなる感謝の言葉を、今、誰に伝えるべきなのか僕は考えていた。

長い付き合いの親友か、それともお世話になった恩師に向けるべきか。倦怠期に入りかけているとはいえ、交際中の彼女に捧げるべきなのだろうか？ それともやはりこれは素直に両親に贈る言葉なのだろうか。

おまえの命はあと五分——。そんな言葉が稲妻のように脳裏に響き渡ったのは、昼食を摂りに職場のあるオフィスビルを出た路上でのことだった。その言葉はまるで神からの啓示のように僕に衝撃をもたらした。そして思ったのだ。今までお世話になった人に、人生最後に感謝の言葉を伝えたいと。

躊躇している暇はなかった。五分間にできることは限られている。二十分待ちのワンコインランチの列に並んでいる場合ではない。

行列を抜け出した僕は、大通りの向こうにそびえ立つビルの十四階を見上げた。あいにく携帯電話は自分のデスクに置いてきてしまった。五分で戻ることは難しいだろう。情けないことに、登録してある電話番号を、僕は何一つ覚えていなかった。人生最後の別れの挨拶を、僕は親友にも恩師にも恋人にもかけることができないのだ。

いや、一つだけ覚えていた。実家の番号だ。平日の昼間、定年を迎えた両親は家にはいるはずだ。僕は最近すっかり見かけなくなった公衆電話を探して走り出した。

がむしゃらに通りを走り続けた僕は、やがて駅裏の立て看板の隅にひっそりと佇む一台の公衆電話を見つけた。僕の前には赤信号と車の列。今さら信号無視という軽犯罪をためらっている状況ではないのだが、僕はそこに飛び込むことはできなかった。残り時間を考えたら、僕がここで車に轢かれて死ぬことだって可能性としては大いにあり得るのだから。

信号が変わり、僕は破裂しそうな心臓の悲鳴を無視して横断歩道を走り抜け、公衆電話に駆け寄った。すぐそばに足を投げ出すように座り込んでいるイマドキな若者が、怪訝な目で僕を見上げるが、構っている暇はない。

息をつく間もなく、僕は受話器を持ち上げる。そして、忘れようもない実家の電話番号を押した。ところが発信音が鳴らない。

そうだ、公衆電話は十円玉を入れないと使えないんだ。こんな基本的な事も忘れてしまうほどに僕は焦っているのか。それとも公衆電話が忘れられているのか。

僕は財布を取り出した。昨日給料日だったので帰りにお金を下ろしている。だが小銭入れには一円玉が四枚入っただけだった。

頭の中が真っ白になった。あとは、あと電話をかけるにはどうすればいいんだ？

テレホンカード？ 記憶の彼方から浮かび出た言葉を頼りに、僕は財布の中身を全てぶちまけた。キャッシュカードにクレジットカード。ポイントカードやら診察券やらあと三つでいっぱいになるエコスタンプやら。この先の僕の人生に不要なものという点ではどれも無価値だ。だが、その中にテレホンカードは一枚も入っていなかった。僕は天を仰ぐ代わりに腕時計を見る。啓

示があった直後から、まさに五분이経とうとしていた。僕はもう、誰にも感謝の気持ちを伝えられない。

相変わらずの姿勢で座り込んでいる若者と目が合って、僕は決断した。

「君。突然の申し入れで驚くかもしれないけど、聞いてくれるかな？」

僕の表情がよほどおかしかったのか、若者は後ずさりしながら身を起こした。

「理由はわからないが、僕はまもなく死ぬ。お世話になった人に別れの電話をしようと思ったんだが、どうも無理みたいだ。思えばつまらない人生だった。このままだと僕はこの世に何一つ有意義なものを残せない。だから君に頼みがあるんだ。少ないがどうか僕の」

若者が身を乗り出してきたので、僕は一気に言い切った。

「僕の全財産を受け取って欲しい。カードの暗証番号は ——」

僕は内ポケットからペンを取り出し、番号のメモを彼の手押しつけた。これでいいのだ。感謝の言葉を伝えたいなんて、結局はそれを聞いて喜ぶ相手の顔を見たいという自分のエゴに過ぎない。そんな無意味なことのために人生最後の時間を費やすなんて、まったくばかばかしい。五分後などという急な死の宣告を受けて、僕は気が動転していたらしい。

はじめからこうすべきだったんだ。誰か一人の役に立つ。それでいいじゃないか。

突然、脇腹に鋭い痛みが走った。何が起こったのかも判らずに僕はアスファルトに崩れ落ちる。とっさに押さえた手からぬるりとした感触が伝わり、視界一杯に若者の薄汚れたスニーカーの踵が広がった。

「ありがとう」

雑踏のざわめきが遠くなる中、確かに僕はそんな言葉を聞いた。

F i n

小説現代ショートショートコンテストに挑戦中の平渡敏（ひらとびん）と申します。  
本職は弁護士ですので、将来は法廷ミステリーを書いてみたいと思っています。  
とはいっても刑事弁護はあまりやっていないのですが……。  
今回はシンプルで可笑しい話から少し文章に凝ってみた作品まで、いろんなカラーの作品を選んでみました。  
楽しんでもらえたらうれしいです。

### 過去の掲載作

- 「将棋」小説現代 2009年10月号
- 「夢の人」小説現代 2010年6月号
- 「種」小説現代 2010年12月号
- 「マナー」小説現代2011年1月号

[平渡敏のブログ](#)



それに気付いたのは、小説現代のコンテストに入選して祝杯をあげた日の夜のことだった。僕の右の手のひらに3つの顔が現れたんだ。

君ももしかしたら聞いたことがあるんじゃないかな、フレドリックブラウンや星新一、阿刀田高といったショートショートの名手の手のひらには必ずいくつかの顔があったって噂を。もちろん公にはなっていないんだけど、人の口に戸は立てられないって言うからね。

その顔が僕の手のひらに現れたんだ。それも3つも。僕はうれしくてたまらなかった。ショートショートに神様たちに違いない。

僕が手のひらをじっと見ていると、神様たちは僕に向かってにこやかに笑いかけて、1文字ずつつぶやいたんだ。

「な」「ま」「ず」って。

すると僕はナマズを題材にした素敵なアイデアを思いつき、ショートショート1編を書きあげる事が出来たのさ。

その夜は興奮して眠れなかった。だってそうだろう、これからは泉のようにアイデアがわいてきて、素晴らしい作品をたくさんものにする事ができるって約束されたも同然なんだから。

明け方になってようやくとうとうしてきたので、眠ろうと思ったんだけど、そんな時に限っておしっこがしたくなるんだよな。

(仕方がないなあ)。僕はトイレに行って小用をすませ手を洗った。

「あっ！」僕は叫んだ。というのも、手のひらの顔たちは洗い落とされてしまったんだ。

そう、ショートショートに神様だからね、オチがあったって訳さ。

(了)

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

本アンソロジーのタイトルとして一田さんが考案された題名を元に（勝手に）作らせていただいた作品です。

最終的には、アンソロジーのタイトルは別のものになってしまいましたが.....。

まったくなんなんだよ、あのとき勝ったのはおいらなのに。ウサギの奴ばかりちやほやされやがって。ミッフィーにピーターラビット、バグズバニーにあとなんだっけ。最近では「どうしてうさぎさんを起こしてあげなかったの？」なんて聞くガキまで出てくる始末だ。やっぱり勝ち方がパツとしなかったからなあ。

でも、不遇の日々も明日まで。実はおいら、あれから血のにじむ努力をしてきたんだ。毎日毎日、朝から晩まで。おいらが走った跡のことを「地面が陥没した」ってニュースになったこともあったなあ。それは苦しかったよ。知ってのとおり、おいらの手足は決してうまく走れるようにできていないんだから。ウサギの奴の鼻を明かしてやりたいから必死で頑張ったんだ。幸い、おいらの寿命は1万年もあるからね。少しずつだけど速くなって、今じゃあ、ウサギの奴なんて相手にならないスピードを手に入れたのよ。

まあ、あの時のウサギはとっくに死んじまったけど、824代目の子孫を見つけ出して勝負を挑んだってわけさ。

よーい、どん。

おいら必死になって駆け出す。ざざっ、ざざざざっ。やっぱ、速いわ。自分で言うのもなんだけど……。みるみるうちにウサギなんて置いてけぼりだ。

半分を走り終わった頃に後ろを振り返って見たら、ウサギの奴、豆粒みたいになってやがんの。なんだか張り合いがねーな。

もうすぐゴールってところで、ふといたずら心がでた。おいらも昼寝をしてやろう、それでも勝ったら、ウサギの奴、ぐうの音も出まい。もちろん、寝過したらいけないから狸寝入りだ。

「グーグー」

随分と待ったけれども、ようやくのことウサギが来た。よーし、おいらを追い抜いてしめしめと思っているところを逆に抜き返してやろう。これはショックが大きいぞ。

「グーグー」

あれ、ウサギの奴、こっちに向かってくるぞ。起こしてくれるのか。なんてこった。おいらはウサギをやっつけることばかり考えてたのに、奴はフェアプレーの精神にあふれているんだ。おいら自分が恥ずかしいよ。ウサギ君、起こしてくれたらおいらと一緒にゴールしよう。なんだか涙が出てきた。

ウサギ君が近付いてきた。

あっ、うらがえされた……。

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

ショートショートを書き始めたころは、こんな感じのパロディをよく書いていました。  
自分で設定を作らなくていいので楽なんですね。  
ただ、その分月並みな内容になってしまいがちです。

エイ子はポチを連れて公園に散歩に出かけた。左手にはコンビニのポリ袋。そう、これを持っているとフン公害に怒る人の嫌な視線にさらされないですむのだ。

「ちょっと、あんた。いつも犬のフンをほったらかしにしとるのはあんたじゃろう」

ベンチに腰掛けていた老人がエイ子に抗議してきた。

「何言ってるの。失礼ね。ほら、ちゃんとコンビニ袋を持っているでしょう」

「だが空じゃのう」

「まだうんちしてないんだから空なのは当たり前でしょう」

「……………」

何か言いたそうな老人を残して、エイ子はその場を離れた。

明るる日。エイ子はいつものように公園の草むらでポチにフンをさせて、そそくさと立ち去ろうとした。

「待ちなさい。やっぱりあんたじゃないか。あんたのせいでみんな迷惑しとるんじゃぞ」

隠れて見ていた老人がエイ子をとがめ立てた。

「今このコンビニ袋に入れようとしていたところじゃない」

「なんじゃと？ フンをそのままにしてあっちに行こうとしていたじゃないか。ワシはちゃんとこの目で見たんじゃぞ」

「証拠はどこにあるのよ。見せてご覧なさいよ。出る所に出てもいいんだからね」

「……………」

エイ子の迫力に気圧されて老人は黙り込んだ。

(くそじじい、うるさいったらありゃしない。あら、五七五になっているわ)

エイ子は老人を言い負かしたこともあって何だか愉快的な気持ちになって帰り道を歩いていた。

と、その時、空から白いものが降ってきた。

ベチャ。

カラスのフンがエイ子の頭を直撃したのだ。

エイ子は楽しい気分を台無しにされて、怒りに震えながら空を見上げた。

カー、カー。

去っていくカラスはくちばしにコンビニ袋を引っかけていた。

(了)

最後の場面の絵柄を想像すると笑えるので、個人的には気に入っている作品です。  
小説現代ショートショートコンテストでは残念な結果でしたが.....。

日曜日の午後。妻はいそいそと韓流スターのコンサートに出かけてしまった。40代も半ばを過ぎたというのに精の出るこった、まったく。なんて事を考えながら、一人、和室で横になってテレビを眺めていると、外からうるさい声が聞こえてきた。

「毎度お騒がせしております。古紙回収車でございます……」

最近あまり見かけないと思ったが、今でもやっているんだな。俺はテレビのボリュームをあげようと思い、リモコンに手を伸ばしかけた。

「ご家庭でご不要になりました古新聞、古雑誌、古女房などがございましたらお出し下さい」

「えーっ！ ふっ、古女房？」俺は思わず起きあがって窓の所に行った。外を見てみるとごく普通の古紙回収車だ。

なんだ、注意を引きつけるためのギャグだったのか。古紙回収の業界も大変なんだな。でも暇だから少し冷やかしてやるか。俺は愉快的気分になったので、外に出て、古紙回収のおやじに話しかけた。

「何だって、古女房をちり紙と替えてくれるのかい？」

「いいえ、新しくして差し上げます」おやじは当たり前のように言った。

「別人に？」

「いいえ、奥様の性格やお気持ちなどは基本的にそのまま、見た目が若くきれいになります。もちろん外見というのはアイデンティティーにかかわりますから、以前の奥様と全く同じというわけには参りませんが」話し方に超然とした雰囲気があって、なんだか引き込まれてしまいそうだ。

「そりゃあよさそうだ。でも、その代わりに魂を取られたりするんじゃないだろうな」

「いいえ、最初はサービスです。ただ、元に戻したりする場合には……」おやじの目がキラリと光ったような気がして、俺は背筋が寒くなった。

「元に戻すって何だよ。女房は新しくなるんだろう」

「ええ、5歳ほど若返って、美しさも20パーセントアップです」

「結構な話じゃないか。あんまりきれいになりすぎて俺と釣り合わなくても困るからな。そのくらいがちょうどいい」

「周りの方の認識もそれに伴って変えておきますから、整形疑惑を持たれたりもしません」

「でも、若くてきれいになったからって、俺から離れて他の男とくっついたりしないだろうな」

「心配性ですね。もちろんそんな事にはならないようになっています」

「至れり尽くせりだな」最初は冗談のつもりだったが、話をしている内に本当にそうなりそうな気がしてきた。

「それでは奥さんをお出しになりますか？」

「うーん……」

俺は先ほどの寒気が気になって、1日だけ考えさせてもらうことにした。

家に入ろうとした時、隣の夫婦が仲良く手をつないで出かけようとしているのが目に入った。

旦那はパツとしないのに奥さんが美人で、いつもうらやましく思っていた。俺たちもあんな風になれるのだろうか。なかなかいい話かもしれないな。

部屋に戻って色々と考えていたら、妻が帰ってきた。頬を上気させて興奮している。

「ねえ、あなた聞いてちょうだい。ピョン様ってホント素敵なんだから……」

妻の話は尽きなかった。歌声が甘くてとろけそうだったとか、2回ほど目が合ってこっちに笑いかけてくれたとか……。俺は相づちを打ちながら話を聞いた。こんな時は興味がなくてもちゃんと聞いてやるのが夫婦円満のコツなのだ。

ひとしきり韓流スターの話聞いた後、ふと思いついて妻に尋ねてみた。

「俺とピョン様で選ぶとしたらどっちにする？」

「いやーね、ピョン様に決まってるじゃない」

妻は目尻にしわを寄せて笑った。

「気持ちがいいほどの即答だな」俺もつられて笑ってしまった。

「当たり前的事聞くからよ」

「そうか……」

そうだよな、これが俺たち夫婦だもんな。なまじっか考えて「うーん、そうねえ……」とか言われるよりずっといい。

俺はなんだか妻がいとおしい気持ちになった。やっぱり交換に出すのはやめにしよう。

大きく伸びをして寝転がると、何年も取り替えていないすり減った古畳の感触が心地よかった。

。

(了)

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

「女房と畳は……」なんてもう言いませんかね？

これは自分としては珍しくシリアスな場面を含む作品です。

こういうのがもっとうまく書けるようになったら、いっばしの作家と言えるのかもしれない。

それはあるホームページから始まった。

「万国の醜男、団結せよ！」

殴り書きのような大きな赤い字のタイトルの後に、檄文がつづられていた。

「我々醜男は、これまで意に反して虐げられてきた。女性にもてない。友達も少ない。仕事の能力も軽く見られる。レストランではトイレの前の席に案内される。おしゃれな洋服を買いに行くと小馬鹿にした目で眺められる。

もうたくさんだ！ 我々が一体何をしたというのだ！

このような理不尽な差別は『搾醜(さくしゅう)』と呼ぶべきものであり、糾弾されなければならない。

ただ、悲しむべきは、搾醜はイケメンと醜男の間にだけ生じているのではないということである。醜男はより不細工な者を搾醜し、より不細工な者は更なる被害者を探す。しかし、これではイケメンどもの思うつぼではないか。我々の真の敵は甘い汁を吸うイケメンなのだ！

我々醜男は足を引っ張り合っている場合ではない。そもそもイケメンよりも醜男の方が人数はずっと多いのである。闘争は必ずや勝利に至るであろう。革命により搾醜をなくし、醜男の真の幸福を勝ち取ろうではないか。

万国の醜男、団結せよ！」

ホームページを訪れた人たちは心を打たれ、それぞれの革命を開始した。

映画会社の関係者はイケメン俳優の映像を少しだけ加工処理して、「イケメンだけど魅力がない」という印象を作り出すことに成功した。

芸能プロダクションの社長は、所属する美人女優に「イケメンなんてつまらないわ。私は醜男に魅力を感じるの」と宣言させ、ブサイク芸人と結婚させた。

会社の社長は、イケメンを窓際に追いやり、醜男を昇格させた。イケメンは昇格差別を裁判で争ったが、醜男の裁判官が請求を棄却した。

そうなってくると数は力である。「イケメンよりも醜男の方が魅力的」という風潮が一気に広がった。人々の価値観が根本的に転換されたのである。

美男美女カップルの離婚が続出し、ふられたイケメン俳優が途方に暮れているみじめな姿がテレビに何度も映し出された。

醜男たちにとって何もかもがうまくいっていたある時、新しいホームページが立ち上がった。「万国の不美人、団結せよ」で始まるそのページは、瞬く間に賛同者を増やし、不美人革命が起きた。

醜男たちは美女を捨てて不美人に走り、美女たちは仕方なく元のイケメンたちとよりを戻した。

不美人革命に続いては、貧乏人革命、無能革命、いじめられっ子革命と立て続けに革命がお



きた。そうこうしているうちに、レストランで悪い席に案内される奴革命や、おしゃれが似合わない奴革命までおきて、とうとう人々の価値観は以前と全く正反対のものになったのである。

A氏は、みんなの憧れである狭く汚い部屋で横になって、人もうらやむ不美人の妻に目をやりながら、ぼんやりと考え事をしていた。

「どこか間違っているような気がするなあ……」

(了)

▼ 作品について    △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

小説現代ショートショートコンテスト予選通過作品です。

共産党宣言のパロディなのですが、若い人には通じにくいかもしれませんね。

## 自己紹介 一田和樹

---

ショートショートが好きです。

星新一先生、R・A・ラファティ、フレドリック・ブラウンのような作品をいつか書きたいと思って日々精進しています。

まあ、なかなかそうはいきませんが.....

小説現代ショートショートコンテストに8回掲載していただき、S-Fマガジンでは選評常連で未掲載です。精進します。

ツイッターでは、140文字の小説、ついのべを書き散らかしています。

長編ミステリが2011年5月に発売、ハッカージャパンで「オープンレンジは振り向かない」(マンガ原作)連載中です。こちらもよろしくお願いします。

[ブログ 一田和樹コンタクトポイント](#)

[ツイッター](#)

厚生労働省大臣の井上は、わくわくしていた。彼は、もうすぐある国の元首と会うことになっていた。その国は、画期的な政策により、高齢化問題を数年で解消していたのだ。その政策が外部には公開されることはなかった。

井上は、日本からの経済協力などのエサを見せることで、なんとか面談にこぎつけたのだ。日本でその政策を取り入れられるかもしれない。そうすれば自分は高齢化問題を解消した立役者だ。井上の胸は震えた。

「さっそくですが、高齢化問題を解決した秘策をお教えいただきたい」

井上は先方がやってくると、挨拶もそこそこに切り出した。相手は苦笑いした。

「たいしたことはしていないのです。あまりに簡単なことなので、かえって言いにくくて秘密にしていました。遺族見舞金を出すようにしただけです」

「遺族見舞金、それはどのようなものでしょう？」

「五年前、我が国の平均寿命は八十二歳でした。八十二歳未満で死んだ方の遺族に、平均寿命まで生きた場合の年金の合計金額をプレゼントすることにしましたのです。例えば、七十二歳で死んだ方の遺族には、十年分の年金がプレゼントされるわけです。逆に、平均寿命よりも長く生きた場合は、遺族から徴収します」

「それは、いったいどういうことなのでしょう？」

井上には、その政策の意図するところがわからなかった。だが、いやな予感がした。

「どういふもこういふも、それだけです。見舞金制度を始めたとたんに、高齢者の死亡率が跳ね上がり、平均寿命も短くなりました。今の平均寿命は、六十歳です。おかげで高齢者のための社会福祉予算はほとんど不要になりました。見舞金の支払いを相殺してもかなりのプラスです。今の我が国の平均寿命は、民間企業の定年とほぼ同じです。生産性の高い国民しかおりません」

政策の意図を理解した井上は、全身から冷たい汗が吹き出すのを感じた。

「ただ、死亡原因は、なぜか事故死や自殺が増えたんですが。まあ、ささいなことです。それより、さらにいいことがあるんです。この政策を秘密にしておくと、お金持ちの国のみなさんが、なぜか経済協力を申し出てくれるんですよ。おかげさまで我が国は、豊かになりました」

元首はそう言うと、楽しそうに笑った。

了

ある日ジラードは、自分の左目がおかしくなっていることに気がついた。

右目で見えるものと違うのだ。自分の部屋で右目だけ開いてみると、普段通りの部屋が見える。左目だけ開いてみると、廃墟が見える。崩れかけた建物が広がる茫々とした景色だ。

もちろん、そこにそんなものはない。いくつもの病院を回ってみたが、原因はわからない。当然、治療方法もない。オカルト研究者や占い師にも相談したが、らちがあかなかった。

ジラードには妻子がいたので、働かなければならなかった。彼は、左目を眼帯で覆って生活することにした。だが、治療をあきらめたわけではない。時折眼帯をはずして、左目に見えている世界がどこのものなのかを探った。どこを見ているのかわかれば、解決方法もわかるのではないかと考えたのだ。

やがて、左目の見ている世界の正体がわかった。

家族で旅行した時、なにげなく左目を開いた彼の目に巨大な墓碑が見えた。二〇五二年と刻まれた大きな立方体の墓碑の周辺に無数の人々が集っている。人々が手にしたプラカードには、二一一一年と書いてある。一〇〇年後だ。自分が見ているのは、一〇〇年後の世界なのだ。ジラードは、一〇〇年後にも残りそうなものがないか、右目で周囲を見回した。離れた場所に山があった。右目で見ると緑に覆われた美しい山だ。左目で見ると、灰色の一本の木も見当たらない山だった。

ジラードは、左目でさまざまなものを見て、それが一〇〇年後の世界であることを確信した。しかし、家族や友人、医師に話したが、信用してもらえなかった。それどころか、正気を疑われた。ジラードは、左目の世界を自分だけの秘密にすることにした。彼は左目の世界の観察を続け、一〇〇年の間に起こることを、おおよそ知ることができた。

未来を知ることができる。それは魅力的なことのように思えたが、左目の世界は夢のあるものではなかった。人類の文明は衰退しており、貨幣も価値を持たなくなっていた。生きるための知恵や体力の方が重要だった。彼は、自分の息子や世界の多くの子供たちに、それを伝えようと思ったが、そのまま伝えれば、正気を疑われてしまう。

そこで童話の形にし、その中にこれから起きること、安全な場所、食料の探し方などを書いておいた。幸いに息子や子供たちは、童話を喜んで読んでくれた。いつの間にかジラードは、おごった人類の文明に警鐘を鳴らす童話作家ということになっていた。彼はことあるごとに、そんなたいそうなことは考えていないと言ったが、周囲はそうは思わなかった。

日がたつにつれて、ジラードの左目は視力を失っていった。ぼやけた霧のような視界になっていった。おかげで両目を開けていても、それほど不自由を感じることはなくなった。ジラードは眼帯をつけなくなった。ごくたまに左目がはっきり見えることもあったが、さほど不便ではなかった。

ある日、息子と歩いている時、道ばたの柱が急に倒れてきた。彼は、とっさに息子の前に飛び出して柱を受け止めようとした。だが、柱は左目に見えていたもので、右目の世界の彼は理由もなく車道に飛び出したのだった。彼は、その事故で死んだ。

彼の死後、文明排斥運動を起した。文明排斥運動は盛り上がり、過激な争いが広がった。争いが終わった時、ジラードが見た通りの世界が訪れた。

彼の息子は、ジラードの童話に書いてあったことを守り、無事に生き延びることができた。

ある日、老いた彼はデジャブに襲われた。この場所を歩いたことがある。記憶が蘇り、はっとして立ち止まった。その時、目の前に柱が倒れてきた。あやういところを助かった彼は、父の視線を感じて涙した。

了

「人は金持ちとして生まれ、貧者として死ぬ」

格言などではない。僕の生きる時代の冷たい現実だ。

数年前、通貨の単位が、全世界共通の『ライフ』になった。ライフとは、寿命の単位でもある。1分の寿命が、1ライフ。70年間の寿命なら、60分×24時間×365日×70年=36,792,000ライフとなる。金と命がイコールになってしまったわけだ。

20年前、人間の寿命は、免疫力の元になる『リディーム』という物質の量で、ほぼ決定されることがわかった。人間は、生まれた時に一定量の『リディーム』を持っており、体内で作られることはない。年齢とともに減少し、一定水準を下回ると、免疫力が低下し、なんらかの致命的な病が発病してしまうのだ。逆に、『リディーム』がたっぷりあれば、どんな病気にもほとんどかからない。『リディーム』は移植が容易だった。金持ちは『リディーム』を購入し、貧乏人は『リディーム』を売るようになった。『リディーム』市場ができて、活況を呈した。

命を金で売買するのか、といった論争が世界中で繰り広げられた。長年にわたる論争の結果、命そのものを通貨単位とすればいい、という結論になった。どちらが大事とは決められないということだ。おかげで赤ん坊は、余命分のライフを持って生まれてくることになった。余命をまるまる売れば金持ちになれる。売らずに寿命をまっとうすれば、余命は減ってゆき、やがて死ぬ。

「人は金持ちとして生まれ、貧者として死ぬ」とはそういう意味だ。

長生きしたい者は、たくさんライフを稼いで、たくさんの『リディーム』を買う。太く短い人生を謳歌したい者は、自分の余命を売って得たライフで享乐的な生活を送るようになった。経済は活性化し、金利はこれまでにないほど高くなった。

僕は自動販売機で缶コーヒーを買った。10ライフ、つまり10分間の寿命分の値段だ。高いのか安いのかよくわからない。でも確実に自分の寿命を削って消費しているのだ。通貨がライフになった時は、なんとなく怖くて、あまりライフを使う気にならなかった。でも、そのうち、びりびりするような刺激と興奮を憶えるようになった。自分の命を交換に、なにかを手に入れるなんて悪魔との取引のようだ。そして、僕は危険な投資にのめりこんでいった。

5年前から僕は、借金取りに追われている。株取引で失敗し、多額の借金を作ってしまった。知人から絶対勝てるという情報ももらって、大勝負をかけたのだ。大儲けして、余命を伸ばすつもりだった。僕は、20年分のライフを担保に借金をして投資した。文字通り『命を賭した』勝負だった。

しかし、知人の情報は間違っていた。僕が買った株は暴落し、紙くず同然になった。借金とりに捕まれば、担保にしていた余命をとり上げられてしまう。僕の余命から20年分を取られたら、あと10年しか生きられない。そんなことはいやだ。もっと生きていたい。僕は、株の暴落

を知って、すぐに逃げ出した。

逃亡中は仕事などできないから、闇業者にちびちびと余命を売って食いつないだ。

だが、悪いことはできないものだ。闇業者から情報がもれたらしく、僕は借金とりに捕まってしまった。

「契約通りお前のライフをいただく」

借金とりは冷たく言った。僕は観念した。

「30年分のライフをもらうぜ」

借金とりがとんでもないことを言った。話が違う。30年は、僕の余命すべてだ。とられたら死んでしまう。

「そんなバカな。借りたのは20年分ですよ」

「利子だよ。利子」

僕は愕然とした。利子がつくとは知らなかった。そういえば、借用書にそんなことが書いてあった。

「利口な連中は、あくせく働かないで、若いうちに自分の余命を全部銀行に預けるんだよ。それで毎年1年分の余命と生活費を、利子で受けとって生きていくのさ。オレたちは、あんたみたいな間抜けな連中から利子の余命をとりたてて、利口な連中にまわす。金、いやライフは天下のまわりものってわけだ」

借金とりは、悪魔のように笑った。

了

## 本の回収

---

偉大な祖先の「本」の回収を開始してから、すでに五百万年が過ぎた。未だに終わりが見えない。

我々の祖先は、宇宙の起源を求めて三千万年前に母星を旅立った。宇宙を彷徨し、立ち寄った星に旅の記録、「本」を残していった。本といっても紙の本ではない。記録を残す星の環境に適合し、気の遠くなるような長期間内容を保持し、他の知的生命体に内容を盗まれないように暗号化されていなければならない。

祖先は最初の頃、巨大な石碑や建造物にホログラム記録を残していたが、それらはせいぜい数千年で瓦解していた。私たちが見つけた時には、修復不可能な状態だ。我々は壊れた本を見つけるたびに、これからの回収の困難さを思い、暗澹たる気持ちになった。もしかしたら、なにも手に入らないのではないか、という不安でいっぱいだった。

だが、本の回収を始めてから五百万年ほど経った頃、壊れていない本を発見した。それはタンパク質だった。祖先は、特殊な構造のタンパク質を作り出し、そこに記録を残したのだ。タンパク質は、その星の生態系の中で生物たちに受け継がれ、百万年以上の長きにわたり、記録を保持していた。

次に見つけたのはバクテリアだ。祖先は、ある種のバクテリアにタンパク質よりも多くの情報を蓄積する方法を開発していた。

そして、我々はまた新しい本を回収することができた。

「艦長、本の回収が終わりました」

私の部下が報告にやってきた。

「本の保存状態は？」

それが一番気になる。

「ご安心ください。良好です。解読は終わっていませんが、情報そのものは全て抜き出し、コピーしました」

「よし、では祝宴だ」

我々は、本を回収するたびに祝杯を挙げることにしている。私は艦内放送で乗組員に語りかけた。

「親愛なる乗組員諸君。諸君らの努力のおかげで、この惑星における本の回収も無事に終わった」

艦内で喝采がわきおこるのがわかった。なにしろこの惑星に到着してから数千年の間、本の探査を行ってきたのだ。来る日も来る日も莫大なサンプルを前に調査を続けて、やっと発見したのだ。それは、まるで難解なパズルを解くような作業だった。その苦勞がやっと報われた。

「これから、いつものセレモニーを行う。すでに船内中央には祝いの宴がしつらえてある。今夜



は思う存分、うさをはらしたまえ」

船が喚声で揺れた。

「私もこれから祝宴会場に向かう。全乗組員は集合だ」

私はそう言うと、報告に来た部下とともに祝宴に向かった。

祝宴会場の壁全体に、地球と呼ばれている惑星の風景が映っている。青い球形の星だ。

「ちょっとズームしましょう」

誰かがそう言うと、地上の生き物が見えるようになった。

「艦長、全員そろいました」

「本の回収を祝って乾杯」

みんなが笑顔で祝杯を挙げる。私は、小さなスイッチを高く掲げてみせた。

「では、恒例のバックアップの消去を行う。不要なバックアップが残っていると、我らの祖先の記録が盗まれないとも限られないからな」

スイッチを押すと、地上を闊歩している二足歩行の生物がばたばたと倒れだした。ちょっとウイルスを撒いただけなのにもろいものだ。まあ、もろいから大量のバックアップを作らないと不安だったのだろう。しかし、人類とかいう生物の遺伝子に記された本は回収した。もはや、こんなバックアップは不要だ。

次の星では、どんな本が残されているのだろう。私は未知の冒険に思いを馳せた。

了

## 永遠の夏休み

---

中学二年生の夏、僕は生まれて初めて一週間の夏休みを手に入れた。それも園山夏美というとびきりの彼女と一緒に夏休みだ。

父や母が子供だった頃は、誰でも毎年夏休みをタダで過ごすことが出来たらしい。今から考えるとおとぎ話、パラダイスだ。

今や夏休みは、お金を出して買わなければ手に入らない。お金のない者は、夏の間を免疫循環槽という風呂みたいなものの中に入って寝て過ごすことになる。こうすると、資源の消費を最小限に抑えることができる。CO<sub>2</sub>の排出もほとんどない。なんてエコなんだ。学生は勉強していない間は、資源を消費しないように寝ているということだ。ただし、お金を払って起きている権利を買うことができる。

僕は授業をさぼってネットでバイトした。おかげで一週間だけ夏休みを買うことができた。彼女の夏美も、なんとかお金を工面して一週間の夏休みを買うことができたというわけだ。

二十年前、医学に革命が起こった。免疫機能を高めることにより、あらゆる病気を根絶することに成功したのだ。ほとんどの人間は百歳以上まで寿命が延びた。当然ながら、この革命により人口は劇的に増加した。おかげで自然破壊、地球温暖化などの問題が一気に加速した。これらを解決するために寿命は配給制になってしまった。国連寿命管理機構が設立され、地球環境を維持できる寿命の総量を計算し、管理するようになった。機構は生まれた子供にランダムに寿命を割り当てた。もちろん、割り当てられる寿命は、本来の寿命よりもはるかに短い。その差の期間間は免疫循環装置に入って眠ることになる。だから、正確に言えば割り当てられる寿命というのは、免疫循環槽の外で活動出来る時間ということになる。ちなみに、僕に割り当てられた寿命は七十六年。まだあと六十年以上もある。

この割り当てられた寿命は売買することができる。お金さえあれば、貧乏な人から寿命を買える。

割り当てられた寿命の大半は、勉強と勤労に使うように決まっていた。生産活動以外は寝ているというわけだ。寿命に含まれない自由な時間は、お金を出して買うのが当たり前だ。

売買される自由時間は、時期によっても価格が異なった。例えば、季節で言えば夏の時間は一番高い。一日で言えばクリスマスはとても高い。だから、お金持ちはクリスマスを外で楽しく過ごし、貧乏人はクリスマスを寝て過ごすことになった。もちろん、お金がなくても、一生懸命お金を稼いで、何年かに一度家族でクリスマスを過ごすことを楽しみにしている人たちもいる。僕らの夏休みもそんなものだ。

僕と夏美は同じクラスだった。授業中、メールを頻繁にやりとりして、夏休みの計画を練った。なにしろ、中学時代に過ごせる夏休みはこれが最後になるかもしれない。気合いが入るといふものだ。

そして、夏休みがやってきた。僕は、生まれて初めての夏を思い切り楽しんだ。初めてのプール、初めての夏の海、夏祭り、花火大会。じめじめと寝苦しい夜すらも新鮮で楽しかった。

楽しい夏休みはあっという間に過ぎていった。

最後の日、夏美と僕は、また学校で会おうと言って別れた。これから秋まで免疫循環槽に入って寝て過ごさなければならない。家に帰ると夏美からメールが入っていた。

電話のモニターいっぱい、夏美の楽しげな愛くるしい表情が映った。一週間ありがとう、から始まって夏美の撮影したビデオとか盛りだくさんだった。

そして、メールは、この夏のことは絶対忘れない、と寂しげな言葉で結ばれていた。僕はなんだかいやな予感がして、すぐに夏美に電話した。夏美は出ない。ドキドキしながら、呼び出し音を聞いていると、夏美の母親の声と顔が電話のモニターに映った。

「おばさん、夏美は？」

「夏美には、言わないでって言われていたんだけど」

夏美は、僕と別れた後、免疫循環槽で永遠の眠りについていて。彼女の寿命はもともとひどく短いものだったそうだ。たった一週間の夏休みを僕と過ごすために、そのわずかな寿命を売ったのだ。

「このまま思い出になるようなこともなく、ただ学校に通っても楽しくないって言ってね」

おばさんはそう言うと声をつまらせた。

夏美がそんなことになっていることに、僕は、なぜ気がつかなかったんだろう。気がついていれば、僕の寿命を半分売って夏美の寿命を延ばすことだってできたはずだ。なんて間抜けなんだ。

「夏美は、この一週間で一生分楽しかった、って言ってた。これからは、あなたに夢の中で会うんだって」

おばさんの言葉を聞いた僕は、その場にうずくまって動けなくなった。夏美は夏休みの夢を永遠に見続け、僕は夏美のことを永遠に忘れないだろう。

了

セラエノの小さな物語 ～小説現代、S-Fマガジン常連掲載者5人の送  
るショートショート集～

<http://p.booklog.jp/book/20147>

著者：齊藤想、八川克也、井上裕之、平渡敏、一田和樹  
表紙：佐倉さく

発行所：ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)  
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20147>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20147>